
禁じられた恋

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁じられた恋

【Nコード】

N3442D

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

戦で敵軍の捕虜になった子爵令嬢のヴィクトリア・レオノチス・ヴァレンティンは戦が終わりが皆が帰還しているのに自分だけが帰還できずに悲観していた。しかし突然、彼女は捕虜から客人へと扱いが変わり戸惑うばかり。命令を下したのは皇帝のベルゼブルの養子、飛天夜叉王丸だと分かった。孤独な天使と捻くれた悪魔の物語。

序章：捕虜から客人へ（前書き）

飛天夜叉王丸の二十四人の妻達の一人のヴァレンタインを主人公に
しました。

まだまだ、夜叉王丸の物語は終わらないので、どうかお付き合い下
さい。

序章：捕虜から客人へ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

皆が復員船や馬車などに乗りながら帰る姿を私は捕虜が収監される鉄格子の付いた窓から見下ろしていた。

復員船や馬車に乗る兵達の中には私の部下や共に戦った友人たちも混ざっていて皆、私の事など忘れていくかのように笑顔だった。

その友人、部下達の姿を見て目元が熱くなった。

私は戦で敵の騎士に破れ捕虜の身になり仲間と共に敵の陣地に構えられた牢に幽閉された。

そして戦が終結し皆が帰れるのに私だけが帰還を許されずに牢に幽閉されたままであった・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・何で、私だけが・・・・・・・・天界に帰れないの・・・・・・・・」

誰も見ていないので私は嗚咽を漏らし一人で泣いた。

「どうして・・・・・・・・？天界のために、必死に戦って来たのに・・・・・・・・」

「なんで、皆が帰れて、私だけが・・・・・・・・」

一人で泣いていると

ギィ

錆び付いた魔法防御が施された鉄製の扉が開いた。

「……………ッ」

反射的に私の涙は止まり牢の中に入って来た人物を凝視した。

歳は二十代後半で真新しい鮮血が見た事もない黒い鎧にこびり付いて周りを恐怖させた。

右の目は眼帯で隠し腰まで伸びた黒の長髪は無造作に後ろで結わえられ左だけの瞳で鉄格子の近くで蹲っていた私を見下ろしてきた。

「……………」

無言で私を見ていたが不意に私の前に膝を着くと手を伸ばしてきた。

「さ、障るなっ」

パッン

伸ばされた手を私は力一杯に振り払ってしまった。

「……………貴様っ」

男の後ろにいた軽鎧を身に付けた兵は身を乗り出してきた。

「……………止める」

男は兵を手で制した。

「しかし男爵様！」

兵が大声で男を見た。

男爵、つという事は私の処分を言いに来たのだろうか？

「俺の事は良い。それより子爵令嬢を風呂に入れ客室に案内しろ」

「は？いや、あの？」

兵は何を言われたのか混乱していた。

「このヴィクトリア・レオノチス・ヴァレンティン子爵令嬢は今から捕虜から客人の扱いをする事に決まった」

「……え？」

「きゃ、客人、ですか？」

兵は驚愕の表情を隠せなかった。

それは私も同じだった。

何故、敵軍の将校である私を客人の扱いなんて……………

「ああ。いま決まった事だがな。まあ、後は頼むわ」

ぽんつと肩を叩き男爵と呼ばれた男は部屋から出て行った。

「え？あ、ちよつ、男爵様っ」

呆然とする兵と私を残して男爵は去って行った。

これが私と未来の夫となる飛天夜叉王丸の運命的な出会いだった。

序章：捕虜から客人へ（後書き）

今年最後の小説です。

これからもどうかドラキュラの小説を宜しく願います。

第一話：男の名は・・・・・・・・・・（前書き）

夜叉王丸が少し無口です。

第一話：男の名は……………

牢から出され浴室に連れて行かれると控えていたメイド達に汚れた身体を隅々まで洗われ綺麗にされた。

「お召しになる服はどうなさいますか？」

一人のメイドが口を開き私に尋ねた。

「……………出来るなら男性用の服を」

「畏まりました」

私に一礼してメイド達は部屋から出て行った。

浴室に一人残された私は部屋の中を見回し逃げ道は無いか探した。

見回すと窓があり近くに行き静かに見ると武装した兵達が辺りを見回していた。

「……………やっぱり駄目か」

ため息を吐き後ろを振り返るとベッドに男性用の服が置かれていた。

何時の間に置いて行ったのだろうか？

そんな事を思いながら私は用意された服を着替え始めた。

着替えを終えると待っていたかのように部屋へとメイドがトレーを
押して入って来た。

「…………お食事を持ってきました」

ソファアの近くにあったテーブルに食事の入った食器を置き部屋を
出ようとしたのを呼び止めた。

「何か？」

「…………何故、私を客人扱いにしたのだ？」

どうしても気になって尋ねた。

「…………それは男爵様にお聞き下さい。私はただ命じられた事
をしているだけです」

メイドは少し戸惑った口調で答えると一礼して部屋を出て行った。

男爵様？先ほど私の前に現れた男か。

「一体何者なんだ？」

私は更に頭に疑問符が浮かんだ。

食事を終えるとまたタイミング良くメイドが部屋の中に入って来た。

しかし、今度は一人ではなく男爵と呼ばれた男も一緒だった。

鎧は外したのか黒一色の服に黒の外套を纏い黒の中折り帽子を被っていた。

「気分はどうだ？ヴァレンティン子爵令嬢殿」

男は左しかない黒真珠の瞳で鋭く私を見て通常よりも低い声で尋ねてきた。

その声は威厳に満ち聞く者を圧倒し見る者を平伏させる力があつた。

「き、気分だと？悪いに決まっているだろ」

相手の放つ威圧感に怯みながら強気で言い返した。

「私だけが一人残されるなど最悪の気分だ！！」

私はテーブルに置いてあつた空の食器を掴むと男に力一杯なげた。

「……………そうか。余計な事を聞いて悪かった」

男は食器を軽々と受け止めるとメイドに渡して謝ってきた。

「……………これからはフレアが身の回りの世話をする。用がある時はレイアに頼め」

男は言うだけ言うと部屋を出て行くことと背を向けた。

「ま、待てっ」

私は去ろうとする男を呼び止めた。

「お、お前の名は？」

「……………地獄帝国男爵、飛天夜叉王丸」

「……………飛天……………夜叉王丸」

男の名前に私はその場に固まって動けなかった。

第一話：男の名は・・・・・・・・・・（後書き）

中途半端な終わりですいませんっ

第二話：隻眼の天使殺し（前書き）

少しシリアスな作品になる可能性があります。

第二話：隻眼の天使殺し

私は男が名乗った名前が頭から離れなかった。

・・・・・・・・・・地獄帝国男爵、飛天夜叉王丸。

彼の名前を知らない天使部隊は恐らくない。

彼は数多くの戦で手柄を立て数え切れない程の天使を殺してきた。

助けを願う天使を八つ裂きにして血肉を食べる隻眼の天使殺し。

仮に助けられても生きてまま獣の餌にされると噂で聞いた。

出陣前に上官からも夜叉王丸男爵に捕まったら自害しろと言われた。

私は思考を中断し食事に使ったナイフを取り首筋に手を当てようとしたが

「・・・・・・・・何をするつもりですか？」

ナイフを取り首に当てようとした手はメイドのレイアによって止められた。

「・・・・・・・・くっ」

私は腕を振り払おうとしたがメイドとは思えない力で無理だった。

「私は男爵様から身の回りを旺盛わかりました。変な真似はしない

「で下さい」

華奢な腕からは想像できない万力で私からナイフを奪うと食器と一緒にトレイに乗せ部屋から出て行った。

「・・・・・・・・・・」

後に残された私は握られた手を抑えながらソファーに倒れた。

「・・・・・・・・・・私、これからどうなるのかな？」

不安を隠せずに私は瞳を閉じ痛みを忘れようと務めた。

ヴァレンタインの部屋を去ったフレアは食器を台所に置くと夜叉王丸を探しに向かい屋敷中を歩き回った。

この洋館は天界に割りと近い場所に作られた要塞として魔界のフォ

カロール将軍が所有していたが戦で陣を構える時に夜叉王丸に貸し与えたのだ。

現在、この屋敷に居るのはフレアと夜叉王丸とフォカロールの兵達しかおらず夜叉王丸の軍は戦後の後始末などで幹部を含め遠出していた。

「ここに居ましたか。男爵様」

屋敷の端に存在する図書室で夜叉王丸はフォカロールとチェスをしていた。

「ん？どうした？フレア」

左目だけを動かして尋ねる夜叉王丸。

「はい。実はヴァレンタイン令嬢の事について……………」

「ヴァレンタイン？ああ。あの一人だけ帰還を許されなかった哀れな天使の娘か」

白いナイトをチェス盤に置きながら思い出したように口を開くフォカロール。

「その天使の娘が何かしたのか？」

「はあ、ナイフで自身の首を切ろうと……………」

「なにつ？」

フレアの言葉に眼を見開く夜叉王丸。

「……………自害する気だったのか」

対してフォカロルは冷静だった。

「大方、お前の在りもしない噂を真に受けて自害しようとしたんだろうな」

「……………」

「お前が気に病む事じゃない」

沈痛な表情をする夜叉王丸にフォカロルは慰めの言葉を掛けた。

「それで子爵令嬢は？」

「私が何とか止めましたが、あの様子では恐らく隙あらば自害、脱走をするのではないかと……………」

「……………そうか」

重い表情の夜叉王丸を見ていられずフレアは一礼して部屋から出て行った。

フレアが出て行ってから夜叉王丸はポツリと漏らした。

「出来るなら天界に返してやりたいんだが……………」

「ほおう。豪く面倒見が良いじゃないか」

夜叉王丸の言葉にフォカロルは意外そうな声を出した。

「隻眼の天使殺しの異名を取るお前が何で天使の娘にそこまで協力的なんだ？」

「……………一人だけ故郷に帰れないのは悲しいだろ？」

黒のビショップを動かしながら真面目な返答する夜叉王丸。

「それだけかな？」

フォカロルは意味有り気な笑みを浮かべた。

「……………何が言いたい？」

不機嫌な声でフォカロルを睨む夜叉王丸。

「いや、何でも」

夜叉王丸の睨みを軽く避けながらフォカロルは小さな笑みを浮かべクイーンを動かした。

第二話：隻眼の天使殺し（後書き）

シリアスな作品はあまり好みじゃないのにそんな作品になりそうです。

第三話・助けに来た部下達（前書き）

早い展開になってしまいました。

第三話：助けに来た部下達

「フオカロルの野郎、何を言いたかったんだ？」

フオカロルとチェスを終えた後は夕食を終え風呂に入り貸して貰った部屋で煙草を蒸かし思考していた。

「本当にそれだけか？」

フオカロルの放った言葉には何か意味が含まれていた。

俺はただあの天使の娘が一人帰還を許されずに落ち込んでいたから出来るだけ力になってやろうと思っているだけだ。

何で一人だけ帰還を許されなかったのか？

先ず仮にも貴族である者を一人残す理由が無い。まあ、内輪揉めで何かあったかも知れないが………

俺やフオカロルを殺す為に残されるという考えも浮かんだが態々、貴族を使わずとも使い捨てを使えば良いから消えた。

過去に俺を暗殺しようとする刺客が送られたが全てが使い捨てだった。

しかし、ヴァレンティンが刺客ではないという考えは捨て切れない。

ヨルムから送られた資料に目を通した。

あいつには戦後処理ではなく何故、ヴァレンティンが天界に帰れな

いのかを調べさせていた。

『名前：ヴァイクトリア・レオノチス・ヴァレンティン。

性別：女。

所属部隊：死天使。

天使階級：能天使。

貴族階級：子爵令嬢。

百八十歳（人間で十八）の時に死天使の対化物部隊に入隊し女性で唯一、部隊体長になるも厳し過ぎ理想主義の為に上層部の受けは悪く今回の作戦でも必要な装備を用意されずに出撃され捕縛されたもの。

天界にいる婚約者のユニエールという主天使が彼女を天界に戻すべく上層部に願っている模様ですが、その他にも何やら裏がありそうな模様なので引き続き調査します。

しかし、部下からの人気は高く彼女を奪還するべく作戦が練られている模様なので警戒するようにお願いします』

資料を読み終わると机に置き吸い終えた煙草を四角形の灰皿に捨てた。

「……警戒ねえー。もう遅いな」

せっかくヨルムからの忠告も無駄に終わりそうだ。

俺の放っておいた風の精霊達が耳元で囁いていた。

『侵入者が入っております』

「やれやれ。せつかく早く寝ようとしたのに……………」

ため息を吐きながら壁に立てていた同田貫を持ち部屋を出た。

ただあいつを天界に帰すなら問題は無い。

それ所か無事に帰れるように手回しをしてやる。

だが、一人だけ上手く隠しているようだが殺気がある奴がいる。

「面倒くせえな」

ぼりぼりと頭を掻きながら廊下の道を早足に動いた。

私はフレアが用意した夕食を取り部屋にあった浴室に身体を洗うと急激な眠気に襲われベッドに入り眠っていた。

暫らくすると人の気配がして目を覚ますとベッドの端に武装した黒染めの服を着た帰還した部下達がいた。

「お迎えに上がりました。隊長」

副官だった部下が私に頭を下げた。

「お前達……」

私は感動のあまり何も言えなかった。

「さあ、長いは無用です。ここから脱出しましょう」

私は直ぐに頷くと着ていたネグリージェの足まで伸びた裾を破くと部下に渡された剣を持った。

「では、こちらへ」

部下に案内され部屋を出た。

ドアの近くには気絶したのか二人の兵が倒れていた。

廊下に出ると侵入した窓から出て用意された馬に乗り屋敷の壁を越

えて屋敷を後にした。

暫らく進むと川の近くに小さな小船が用意されていた。

「この船で沖まで行きそこからは用意した船に乗ります」

馬から降りた部下が命令して小船に近づいた。

「これで天界に帰れる」

私は湧き上がる涙を抑えながら小船に近づいた。

小船まで後数歩という所で背中に衝撃を受けた。

一瞬だったが、その後は生暖かい感触と力が抜けて地面に倒れた。

後ろを振り返ると血塗れの短剣を握り薄ら笑う見た事も無い男がいた。

……誰？

薄れ行く意識の中で私は部下達の声聞いた。

ごめん。せつかく助けに来てくれたのに天界に帰れないで……

部下達は涙を流していたが、直ぐに怒りの表情になり私を刺した男に斬り掛かって行った。

私は剣のぶつかる音を聞きながら意識を手放した。

第三話：助けに来た部下達（後書き）

出来るだけ長い作品になるように努力します。

逸話・空を舞う漆黒の翼（前書き）

やっぱり何だかシリアスになっちゃいました。

逸話：空を舞う漆黒の翼

「隊長！！」

部下達は血を出しながら倒れた上官に叫んだ。

「安心しろ。まだ死なない。だが、短剣に仕込んだ毒で死ぬがな」

「きさまっ！何故、隊長を刺した！？」

「これから死ぬ奴らに話す義理は無い」

男は短剣を鞘に収め腰に差した剣を抜いた。

「ふざけるな！！」

部下達は剣を抜き男に襲い掛かった。

「……………」

男は口元で笑いながら一瞬で部下達と間合いを詰めると次々と斬った。

「がっ……………」

「……………あっ……………あっ」

「は……………か……………」

部下達は血を噴出しながら倒れた。

「ふん。雑魚が」

男は血の付いた剣を鞘に収めると小船へと近づいた。

「やれやれ。簡単な任務だったな」

愚痴を溢し小船に足を掛けようとした。

「良い腕だが故意に殺さず急所を外すのは悪趣味だな」

モーゼルミリタリーを構えながら煙草を蒸かす夜叉王丸が小船に乗りながら笑っていた。

銃口は男に向いていた。

「誰にも気付かれずに脱出したつもりなのですがねえ」

驚いた表情をしたが直ぐに笑い顔になった。

笑いながら短剣に手を伸ばしたが

「バレバレだぞ。馬鹿が」

横から出て来たフォカロルの手によって阻まれた。

「誰の差し金でこの子爵令嬢を殺すのか知らんが、そいつらを死なせる訳にはいかん」

「それは……………どうですかね?!」

男は隠し持っていた短剣を横に振るい腕を掴んでいたフォカロルを振り払い真正面に立つ夜叉王丸に襲い掛かった。

夜叉王丸は紫煙を吐きながら引き金を引いた。

遊底が反動で後退し空になった弾丸が出た。

「くっ……………」

剣を弾き飛ばされた男は利き手を抑え地面に膝を着いた。

「安心しろ。殺しはしない。今の所はな」

モーゼルで中折り帽子を上げながらニヤリと夜叉王丸は笑った。

「誰の差し金か吐かせてから……………たっぷりと殺してやるよ」

「ひ、ひいっ」

夜叉王丸の受けべた笑みと殺気に男は気絶した。

「おい。それよりこの子爵令嬢を早く屋敷に運ばないと死ぬぞ」

大量の血と毒でヴァレンタインは青ざめて震えていた。

「それじゃ、その男は頼むぞ」

背中から鴉のように漆黒の翼を出すと夜叉王丸はヴァレンタインを抱き上げ空高く飛び上がり屋敷へと飛んでいった。

「将軍に雑務を押し付ける奴なんてお前くらいだ」

ため息を溢しながらフォカロルは男の襟首とヴァレンタインの部下達を傍で控えていた部下達に馬車に乗せると自身も専用の馬車に乗り込み屋敷へと走らせた。

逸話・空を舞う漆黒の翼（後書き）

これからどうなるんでしょうか？

第四話・寝起きのギャップ(前書き)

少しコメディが入りました。

第四話：寝起きのギャップ

「……………ん」

私は額に温かい感触を感じ目を覚ました。

「……………ここは……………?」

周りに目を回すとさっきまでいた客室のベッドの上だと分かった。

窓から見える太陽は既に空高く上がっていた。

「……………お目覚めになりましたか?」

フレアがずれた濡れタオルを直しながら私を見た。

「……………私は一体……………?」

「刺客に毒が仕込まれた短剣で背後から刺され三日間うなされてい
ました」

フレアに言われ改めて思い出した。

部下が助けに来てくれて屋敷を出て小船に乗ろうとしたのを後ろか
ら男に刺されて部下達が男に襲い掛かって、そこで意識を失ったん
だ。

そうだ！部下だ！！

「ぶ、部下は?!私のぶ……………」

ベッドから立ち上がりフレアに詰め寄ったが最後まで言う前にフレアに頭を押されベッドに強制的に寝かされた。

「慌てなくても貴方様の部下は全員が傷を負っていますが無事です」

「……………本当?」

私は疑う眼差しをフレアに向けた。

「本当です。貴方様が疑うのも無理ありませんが、この屋敷のフォカロール将軍も男爵様も捕虜に無慈悲な行いはしません」

私の疑う眼差しにもフレアは真面目に答えてくれた。

「貴方様の部下達の中に女性が二人いたので傷が治りしだい此方よりも大きい客室にご案内します」

フレアは一礼して部屋を出ようとした。

「待つて!」

「……………何か?」

首だけを動かし尋ねてくるフレア。

「ここまで私を誰が運んだの?」

「……………男爵様です」

少し間があったがフレアは答えてくれた。

「男爵様が毒で手当てを急ぐ貴方様を抱いて屋敷まで運んでくれたんです」

男爵が私を？

「男爵様は貴方様の思っている程、恐ろしい方ではありません」

それだけ言うとフレアは頭を下げ部屋を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

後に残された私はフレアが言った言葉が頭から離れず寝付けなかった。

「・・・・・・・・男爵様」

フレアはフォカロルから与えられた部屋で眠る夜叉王丸のドアノブを叩いた。

「・・・・・・・・・・」

しかし、部屋からの返事はなかった。

「・・・・・・・・失礼します」

断ってからドアを開け部屋に入るとベッドで小さな寝息を立てながら眠る夜叉王丸に近づいた。

「男爵様、起きて下さい」

夜叉王丸を揺さ振ってみるが夜叉王丸は身じろぎをただけだった。

「男爵様っ。起きて下さい。もう昼ですよ」

少し力を入れて揺さ振ってみる。

「んっ、後、五分だけ」

普段の姿からは信じられない可愛らしい声がフレアの耳に入った。

「だ、駄目ですっ。将軍が呼んでいるんです」

一瞬、許そうとしたが心を鬼にして夜叉王丸を起こしに掛かった。

「ふぁー、まだ寝足りないなかったんだがな」

今度は打って変わって目付きの鋭い怖顔になり声も渋く低い何時も
の声に変わった。

『本当に寝起きのギャップが激しいわよね』

夜叉王丸が起き上がり乱れたシーツなどを直しながらフレアは思った。

この男爵は眠っている時と寝起きのギャップが激しいと思う。

彼と夜を共にした女性達は彼のギャップに戸惑ったがそのギャップが何とも良いと絶賛していた。

「ふぁー、フオカロルは？」

「中庭でコーヒーを飲んでいる所です」

「わふあかった」

欠伸交じりに礼を言うと夜叉王丸はドアに近づいた。

しかし、寝巻き姿のまま部屋を出ようとする夜叉王丸をフレアは慌てて止めた。

「服を着替えて下さいっ」

「んー、面倒臭いー」

愚痴を溢しながら夜叉王丸は寝巻きを脱ぎ始めた。

「髪の手入れは私がするので着替えてもいて下さいよ」

脱ぎ散らかした寝巻きを拾いながら洗面所に向かう夜叉王丸に言った。

「…………ふぁーい」

「はぁー」

気の抜ける返事をする夜叉王丸にフレアは小さくため息を吐き寝巻きを畳みベッドに置いた。

第四話・寝起きのギャップ（後書き）

これからも精進します。

第五話・男爵の気紛れ（前書き）

また短くてすいません!!

第五話：男爵の気紛れ

「まだかー？」

気の抜けた声で自分の髪を櫛で梳かすフレアに尋ねた。

「もう少し待って下さい。男爵様の髪の毛って剛毛だから大変なんですよ」

フレアは夜叉王丸特性に作らせた象牙の櫛を使って必死に夜叉王丸の髪を梳かしながら答えた。

「そんな剛毛なのか？」

「そうですね。ずっと髪を手入れもしないで伸ばし続けたからこうなっただんですよ」

「……………」

夜叉王丸はぐうの音も出ずに黙った。

「さあ、終わりましたよっ」

梳かし終えた髪を黒い紐で後ろに結って終わった。

「おう、さあてフォカロルの野郎はまだ居るかな？」

椅子から立ち上がった夜叉王丸は腕を伸ばしやっと覚醒した。

「恐らく食後のコーヒーを楽しんでいるかと」

「雅な事だな」

それだけ言うと夜叉王丸は部屋を出て行った。

「よお。フォカロル」

フレアの言う通りフォカロルは食後のコーヒーを楽しんでいた。

「よお、ではない。遅いぞ」

コーヒーを飲みながら半眼で夜叉王丸を睨んだ。

「仕方ないだろ？フレアに髪の手入れを念入りにされたんだからよ」

フォカロルと向かい合うように席に座りながら言い訳をする夜叉王

丸。

「男爵様。コーヒーで御座います。勿論、最高級のミルク入りです」
二人の間に執事と思われる白髪の老人が夜叉王丸の座った席にコーヒーを置いた。

「おお。ありがとう」

嬉しそうに笑いながら礼を言う夜叉王丸。

「いえいえ。感謝の極みです」

老人も笑顔で答え去って行った。

「それで何か吐いたか？」

コーヒーを飲みながら三日前に捕まえた男の事を尋ねた。

男は屋敷の牢に閉じ込められ拷問をされながらも口を割らなかつた。

「いや、まったく吐かない」

「子爵令嬢の部下達は？」

「あいつらなら個室で寝ている。お前の指示通りだろ？」

「ああ。あいつらの忠義は見事だからな。丁重に扱わないとな」

「ふっ、これが隻眼の天使殺しの異名を持つ男のする事か？」

愉快的な笑いを漏らすフォカロルに

「ただの気紛れだと思ってくれれば良い」

ぶっきら棒な口調で答える夜叉王丸にフォカロルは更に笑った。

まったく。この男ほど心身共に捻くれている悪魔は存在しないだろう。

しかし、捻くれているが同時に本当の意味で優しく尊敬できる相手は魔界広しと言えど中々いないだろう。

「なんだよ。人を見て笑いやがって」

「いやいや。何でもない」

夜叉王丸の睨みを受け止めながらフォカロルは湯気を出しながら優雅な香りを漂わすコーヒーを口にした。

第五話・男爵の気紛れ（後書き）

今度からはもう少し長く書きます！！！

第六話：果てしない拷問（前書き）

今回は少しグロテスクな表現があります。

第六話：果てしない拷問

「さて、そろそろ本腰を入れて誰の差し金か聞きだすか」

コーヒーを飲み終えテーブルに置き立ち上がる夜叉王丸。

「ほおう。お前が直々に吐かせるとは……………奴が哀れだな」

夜叉王丸を愉快そうに見ながらフォカロルも立ち上がった。

「俺も付き添いで見て良いかな？」

「別に良いぜ。見られて困る訳じゃないし」

フォカロルの同行を快く了承する夜叉王丸。

「では、行こうか？」

「ああ。行くとしよう」

二人は肩を並べ地下牢へ向かった。

地下牢は屋敷の夜叉王丸の直ぐ近くでヴァレンティン達の部屋からは離れて作られていた。

地下牢へ通じる階段を下りると一つの牢屋にたどり着いた。

ドアを開け中に入ると逆さ吊りにされ身体中から血を流し満身創痍

の男と汗だくだらけの拷問官がいた。

「男爵様、將軍」

拷問官は二人に会釈した。

「まだ吐かないんだって？」

煙草に火を点けながら尋ねる夜叉王丸。

「はい。こんなタフな奴は久し振りです」

「おい。お前は誰の差し金だ？」

男に近づき尋ねた。

「さあ？誰の差し金でしょうね？」

男はうつすらと笑った。

「その根性は認めるが何時まで持つかな？」

火を点けたばかりの煙草を男の頬に押し付ける夜叉王丸。

「ぐっ……」

「熱いか？熱くないか？」

「……熱くないですね」

しれっとして答える。

「ふーん。ならもつと熱くしても大丈夫だよな？」

夜叉王丸は男の足元に二本の五寸釘を刺した。

「があ！」

「まだまだ」

男の足元に魔術で浮かぶと百目蠟燭を二本、釘の尖端に差し込んで火を点けた。

蠟燭は見る見る溶け蠟が傷口に流れ込んだ。

「ぎっ、あがつ」

「どうだ？吐くか？」

「な、なんの……」

「これでも吐かないのか？」

些か驚いた声を出す夜叉王丸。

「それじゃ、もう少し痛い拷問をするか？」

床に降りるとテングルハットを取って顔を扇いだ。

「熱いな。お前も熱いだろ？」

「え、ええ。熱いですね」

脂汗を流しながら男は答えた。

「おい。桶に水を入れて持って来い」

夜叉王丸は拷問官に命令した。

「“ぶりぶり”をやるんですか？」

「ああ。熱いなら冷やしてやらないとな」

拷問官の問いに新たに煙草を出しながら答える。

「畏まりました」

拷問官は一礼して部屋を後にした。

「“ぶりぶり”？随分と品の無い名だな」

「俺が付けた名じゃない」

フォカロルの言葉に不機嫌そうに答える夜叉王丸。

「それなら自白するのか？」

「さあ？吐かないなら仕方ないから傷口を鼠にでも噛ませて死なせる」

「なっ……ね、鼠っ」

男は怯えた声を出した。

「……どうやら鼠が嫌いらしいな」

ニヤリと笑う夜叉王丸。

「男爵様っ。水を持って来ましたっ」

拷問官が仲間を数人に担がせて桶を担いできた。

「わりい。やっぱ水いらない」

「えー!!」

拷問官達はその場に座り込んだ。

「わりいわりい。詫びに今夜は飯を奢ってやるから」

「ぶー、分かりましたよ」

拷問官達は渋々ながら承諾し戻って行った。

「人使いが荒いな」

「俺は後で報酬を払う。ただ働きをさせる將軍に言われたくないな」

「……」

フォカロルは何も言えなかった。

「さあて、あいつらが戻るまでもう少し痛めるかな？」

無言でフォカロルを無視して夜叉王丸は人が悪い笑みを浮かべて男
に向き直った。

「ひ、ひいつ!!」

この数分後、男は鼠に傷口を噛まれ死ぬ済んでの所でヴァレンタインを殺すように命を出した輩の名前を漏らし死んだそうだ。

第六話：果てしない拷問（後書き）

グロですいませんでした。

第七話・部下との再会（前書き）

感想・評価をお願いします。

第七話・部下との再会

「…………ふー」

刺されてから一週間後、ようやくベッドから起き上がる事を医者から許可された。

本当ならベッドから起き上がっても脱出した私は部屋から出られず監視役が付くはずなのだが監視の兵も部屋からの外出も禁止されずに許可された。

今はリハビリとして屋敷の中庭を歩いていた。

この屋敷の庭は天界からも近いからか天界に咲く花が多数あり心地良い香りが鼻を刺激した。

「この花は……………」

花畑に咲いていた一輪の白い花に視線が止まった。

真っ白で汚れを知らない純白の天使の色。

折らずに近くで見てみる。

『この花言葉は可憐。まさに君の事を表しているね』

天界にいる婚約者、ユニエールから婚約を申し込まれた時に渡された花。

「……………ユニエール」

貴方は今、どうしているの？

元気にしている？

私は白い花の前に跪いて涙を流し始めた。

「……………帰りたい。あの人のいる、天界に帰りたい……………」

「ここにおりましたか」

ぱつと背後を振り返るとフレアが静かに立っていた。

「……………貴方様の部下がお会いしたいそうです」

私の涙を見ても反応せずに用件を述べた。

「……………分かりました」

涙を拭き立ち上がった。

「……………これをお使い下さい」

歩こうとした時にフレアから紺色のハンカチを渡された。

「涙をちゃんと拭かないと部下の方々に示しが着きませんから」

それだけ言うとフレアは反対側を向いた。

「……………ありがとうございます」

「……………礼には及びません」

無愛想な言葉も今の私には優しく聞こえた。

「……………こちらになります」

涙を拭き案内された場所は大広間で私を救出に来た部下達がここで待っているらしい。

「……………ヴァレンタイン様をお連れしました」

フレアがドアノブを叩くとドアが開いた。

「……………失礼します」

フレアに続き中に入ると包帯を巻いた数人の部下と將軍のフォカロルと黒一色の服に身を包んだ男爵がいた。

「……………隊長っ」

部下達は私を見ると安堵のため息を吐いた。

「……………ご無事でしたか」

「貴方達も無事で良かったわ」

互いに無事を祝った。

「傷を負った私達を夜叉王丸男爵様が助けてくれました」

部下達の言葉を聞いて椅子に座り脚を組みテングアルハットを深く被り腕を組んでいた男爵に近づいた。

「……………部下を助けてくれてありがとうございます」

私は男爵様に礼の言葉を述べ頭を下げた。

「……………」

しかし、男爵は無言だった。

「おい。飛天。何か喋れよ」

一緒にいたフォカロル將軍が男爵に話し掛けた。

「…………何を言えと?」

暫らくの間を空けて男爵が口を開いた。

前に聞いた声と同じく威圧的な声色だった。

「んー、そうだな?例えば、気にするな、とかお前らは全員、天界に帰してやるとか、言えよ」

「……………そう言うのは將軍のお前が言え」

それだけ言うと男爵は椅子から立ち上がり部屋を出て行った。

「……………やれやれ。筋金入りの捻くれ者だな」

「そつでございませぬ」

フォカロル將軍とフレアはどうやら男爵様の事で笑っていた。

「まあ良い。フレア、客人に茶を出しなさい。私は仕事に戻る」

「畏まりました」

フォカロル將軍とフレアも席を立ち後に残されたのは私と部下だけだった。

第七話・部下との再会（後書き）

感想・評価をお願いします。

逸話・影の軍団（前書き）

今回は少し映画のタイトルが出てきます。

逸話・影の軍団

「おい。飛天」

自分の部屋へと続く廊下を歩いていると後ろからフォカロルが追っ
て来た。

「何だよ？今から昼寝するんだよ」

低血圧で頭が上手く回らないから苛々した声を出す。

「俺にあそこを任せるなよ。無責任だぞ」

立ち止まった俺に腕を組んで叱り付けるフォカロル。

「俺が無責任なんて今に始まった事じゃないだろ？」

踏ん返り返った口調で答えるとフォカロルはため息を吐いた。

「……………そうだな。お前に説教をしようとした俺が馬鹿だった」

がくつと肩を落とすフォカロル。

「あまり気を落とすな。見た目より老けて見えるぞ」

振り向き様に言い残すと再び歩み始めた。

さあて、早くベッドで心地よい夢をみよう。

「って、何を自己完結してるんだよ」

背後から立ち直ったフォカロルが追って来た。

ちっ、しっこいな。

「しっこい男は嫌われるぞ」

「うるさい。お前こそ捻くれ者は女に嫌われるぞ」

「余計な世話だ」

「そっちこそ余計なお世話だ」

互いに一步も引かずに睨み合っていると

「……殿」

横を向くと黒い服に身を包み黒いスカーフで口元を覆った男が片膝を着いていた。

「鶴か？」

俺が尋ねると男は無言で頷いた。

「遅くなり申し訳ありません」

「いや、お前らに限って仕事をさぼったりはしないだろ？」

こいつらは俺が考案して創立した隠密部隊。

まあ、分かり易く馴染みのある言葉で言えば忍者だな。

アラストールや秘密警察長官のネルガルなんかは影の軍団とか言っているな。

まあ、実際に映画を見て思い付いたんだけど……………

従者の一人、鵜が隊長を務め情報収集、謀略などを主な仕事にしているが、稀に暗殺もさせている。

こいつらは他の部隊とは違い俺の直属の命令しか聞かず命令実行率も100%だ。

「はっ。誓って仕事を怠慢するなどという事は致しません。しかし、ダハーカ殿が仕事を怠けておりました」

はあ、またあいつか。

「分かった。後で給料から引いて置くか」

「それで何か分かったか？」

「はっ。ヨルムンガルド様からの報告を受け上層部の奥まで調べた所……………このような物が見つかりました」

懐から書類を取り出して俺に渡した。

「……………こいつは……………」

「おいおい。この書類って……」

フォカロルも俺の書類を見て眉を顰めた。

鵜が俺に渡した書類は

“魔界侵略”

と書いてあった。

詳しく見てみると内容は天界に帰還できなかったヴァレンティン子爵令嬢は飛天夜叉王丸男爵の慰み物となり雑兵に殺された。

「……なるほど。奴らの狙いはこれが」

俺は我慢できずにその場で書類を握り潰した。

「……天界の貴族を殺した。その弔い合戦。大義名分付きでこっちは不利な戦だな」

フォカロルも機嫌が悪そうな顔で毒づいた。

「これ考えた奴は？少なくとも熾天使達のような奴らではないだろ？」

あいつらは性格は理想主義者で悪を許さないが、こんな手は使わん。

「はい。一部の軍上層部が殿を殺そうとして考えたものです」

「俺を殺す為に下らん戦をまた始める気か？」

ふざけるな。俺を殺す為に関係ない民を巻き込むな！！

「……………鵜」

「……………はっ」

「……………戦を起こそうとする奴らのリストは？」

「既にアップしています」

「……………これ以上、妙な動きをしたら……………」

俺は親指を下に向け首筋を切った。

「……………御意」

鵜は音もなく姿を消した。

「……………流石は影の軍団。主人の言おうとしている事を分かっているな」

フォカロルは面白そうに笑った。

「楽しそうだな？」

「まあな。情報が筒抜けでそれを知らずに計画を進めるなんて滑稽としか言えないだろ？」

腹を抱えながら笑うフォカロル。

「……………そうだな」

俺は苦笑して再び廊下を歩き始めた。

逸話・影の軍団（後書き）

千葉真一さんの作品は殆どが大好きで使わせて頂きました！！

第八話：これからの事（前書き）

更新が遅れました。

第八話：これからの事

紅茶の用意を済ませたフレアは用があつたら呼べと言って部屋から出て行つた。

「副長、貴方たちの行動は上層部は了承していたの？」

紅茶を飲みながら私は副長だつた男に尋ねた。

「いえ、私達の独断です。上層部は体長を助ける動きがありませんでした」

「……そう」

恐らくはそうではないかと思つていたが、実際に言われると落胆を隠せなかった。

「……隊長がいなくなった部隊は解散。俺たちは軍から追ひ出されました」

「……」

皆の嗚咽が聞こえてきた。

「隊長を護れなかったから当然だと思ひました。だけど、隊長は生きてるのに死んだ事にされたのが我慢できなかつたんです」

「だから、処罰は覚悟の上で俺達は隊長を助けに来たんです」

副長の言葉に皆が頷いた。

「……………ありがとう」

私は溢れ出す涙を止められずに暫らく嗚咽が止まらなかった。

「……………」

ドアの前で暫らく立っていたフレアは足音を立てずに静かにドアから離れた。

彼女は無表情のまま廊下を歩いていたがよく見れいれば身体が震えているのが判る筈だ。

着いた場所は夜叉王丸の寝室だった。

「……………」

数回、ドアノブを叩くとドアが開いた。

「……………失礼します」

中に入ると刀の手入れをしている夜叉王丸が視界に入った。

「……………どうした？」

血を吸い歪んだ光をまぶし出す刀の刃を眺めながらフレアに尋ねた。

「はっ、ヴァレンタイン様と部下の事についてです」

「……………話してみる」

夜叉王丸は刀を鞘に収め壁に立てた。

「あの方達を如何なさいますか？」

「……………天界に帰す予定だった」

「だったとは？」

首を傾げるとくしゃくしゃになった書類を渡された。

「これは……………!？」

書類に書かれた内容を見てフレアは固まった。

「……………それを見て予定が変わった。もう暫らくこちらに留めて置く」

怒りを押し殺した声で呟く夜叉王丸。

「……………畏まりました」

フレアは一礼すると夜叉王丸に書類を渡した。

「……………ふん」

書類を受け取ると乱暴に机に叩き付けた。

「……………これからもあいつらの世話は頼んだ」

窓を開け葉巻を銜えながらフレアに命令する夜叉王丸。

「……………畏まりました」

フレアは一礼して夜叉王丸の寝室を出て行った。

第八話：これからの事（後書き）

評価、感想をお願いします。

第九話：騎士と魔王（前書き）

評価感想をお願いします。

第九話：騎士と魔王

「…………旦那。ただいま戻りました」

フォカロルとチェスをしていると副長のゼオンが帰ってきた。

「ご苦労だった。それでどうだった？」

労いの言葉を掛け命じていた仕事の結果を尋ねた。

「はい。やはりヴィス公爵は境界線を越えて魔界の資源を強奪して
いました」

やはりあの狸、そんな事をしていたか。

「さらに事実を知った村人達を皆殺しにしようとしていました」

もっと早く兵を挙げていたら…………

自責の念に刈られて握り拳をつくった。

「気に止むな。飛天」

フォカロルが励ますような口調で言った。

「幸い生存者がいたので連れて来ました」

ゼオンが後ろを向くとドアから薄汚れボロボロになった衣服を着た
十二、三歳の少女が出て来た。

「生存者のリア。両親は戦火で死んだそうです」

リアという少女は小刻みに震えていた。

「.....」

俺はリアに近づき片膝を着いて小さな頭を撫でた。

「お前の家族にはすまなかつたな」

「心配するな。仇は取ってやるからな」

リアは暫く呆然としていたが涙が出て来た。

「よしよし。ゼオン」

俺はリアの頬を伝う涙を指で拭きながらゼオンに命令した。

「フレアに言って風呂と温かい食べ物を用意させる」

ゼオンは分かったように一礼して部屋を出て行った。

「やれやれ。相変わらず女子供には甘いな」

フォカロルは溜め息を吐きながら呆れ果てていた。

「うるせえな。別に良いだろ？」

俺が少し不機嫌な表情でフォカロルを睨んだ。

「誰も悪いとは言っていないだろ？」

フォカロルも睨み返してきた。

「…………お取り込み中の所、失礼します」

横を振り向くと鶴が片膝を着いていた。

「…………何かあったのか？」

こいつが来るって事は何か遭った訳だな。

「はっ。あれから軍上層部に動きはありませんが別の人物に動きがありました」

「別の人物？」

俺とフォカロルは顔を見合わせた。

「子爵令嬢の婚約者であるユニエールが単身でこちらに来るとの事です」

「……………ほう。囚われの姫君を助けに行く騎士じゃないか」

「って事は俺が魔王か」

フォカロルの言葉に冷静に取った。

「だろうな。現に婚約者を幽閉してるんだからな」

「……………我が殿を愚弄するか？」

殺気を込めた瞳でフォカロルを睨む鵜。

「止める。鵜」

「……………はっ」

俺の制止の命令に鵜は直ぐに反応した。

「そんなに怒るなよ。鵜」

フォカロルは苦笑しながら言ったが

「黙れ。我が名を気安く呼ぶな」

鵜は怒り浸透だった。

「……………はぁ」

言い争う二人に気付かれないように溜め息を吐いた。

第九話：騎士と魔王（後書き）

評価感想をお願いします。

第十話：無口な男爵（前書き）

評価感想をお願いします。

第十話：無口な男爵

「……………で、どうするんだ？」

鵜が怒り心頭のまま去った後にフォカロルが俺に向き直った。

こいつ、絶対に鵜で遊んでるな。

「どうするとは？」

「ユニエールとか言う童話の騎士気取りの馬鹿天使をどうするんだ？」

「酷い言いようだな」

童話の騎士気取りとか言い方が酷いぞ。

「本当の事だろ？相手の実力も知らずに挑むなど馬鹿もいい所だ」

「俺も童話の騎士気取りで死にかけたから傷つくぜ」

「お前の昔話はどうでも良い。殺すのか？」

「逆に俺が殺されるかも知れないぞ？」

「お前が？ミカエル達を叩きのめした奴が殺される訳ないだろ」

俺の言葉を冗談としてフォカロルは取った。

「まあ、その話は置いて子爵令嬢に言っかどうかだ」

「言わない所で何れは分かるだろうな。こつこついう奴は真っ正面から挑むからな」

呆れ果てた口調で喋るフォカロル。

「はぁー、面倒臭いな」

フォカロルは溜め息を吐いて額を抑えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺も小さく溜め息を吐き天井を見上げた。

一緒の部屋に移されたエリアス、リナと談話していると部屋のドアを叩く音がした。

「どちら様ですか？」

フレアなら名を出すはずだから別だと判断しドア越しに尋ねた。

「・・・・・・・・・・」

しかし、返答はせずにドアが開いた。

中に入って来たのは夜叉王丸男爵だった。

「男爵様っ」

私とリナ、エリアスは狼狽した。

男爵は無言で近づいて来ると数歩の所で止まった。

「・・・・・・・・・・」

男爵は何も言わずにずっと立っているだけだった。

「・・・・・・・・あの、男爵様？」

私が問い掛けても男爵は無言だった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

沈黙が流れていたが少しすると

「……………くっ」

急に男爵は口端を吊り上げて笑った。

「……………やはり駄目だな」

くくくくっ」と笑い出した男爵に私達は首を傾げた。

「……………あのー、男爵様？」

再度、尋ねると男爵は腹を抑えながら

「……………いや、何でもない。後でフレアから言わせる」

それだけ言うと男爵は部屋を出て行った。

「……………何だったのかしら？」

私達は首を傾げるばかりだった。

男爵の意図が解らない。

一体、何を話しに来たのかが？

それから数時間後にフレアからユニエールが来ると聞かされた。

第十一話：瞳の強さ（前書き）

少し夜叉王丸が感情家になります。

第十一話：瞳の強さ

「貴方の婚約者、ユニエール侯爵が単身でこちらに向かっております」

フレアから放たれた人物の名前に私は目を見開いた。

ユニエール……私の婚約者。

私を助けに来てくれるの？

いや、違う。

ユニエールの性格なら恐らく私を……

「男爵様が先程、見えたのは……」

「その事を伝える為です」

「男爵様は貴方だけでなく部下の方も連れて帰るのを条件にユニエール侯爵と交渉します」

用件を伝えるとフレアは部屋から出ようとした。

「待って！」

「……何か？」

「ユニエールが交渉を拒んだら？」

彼の性格からして敵との交渉などしない筈だ。

「……………殺しはしないと思いますが力付くでも交渉させるはず
です」

それだけ言うとフレアは部屋から出て行った。

……………ユニエール。

「……………男爵様」

フレアは中庭にある木の下で水色のワンピースを着た金髪の女の子
とゲームをする夜叉王丸に近づいた。

少女の名前はリア。

つい先刻、副長のゼオンが連れて来た天界の少女だ。

汚れを落とすと綺麗な人形のように見える者を魅了して止まらず年端も行かない娘に負けた嫉妬を感じた。

「ん？フレアか。どうした？」

リアはフレアを見ると怖がった表情で夜叉王丸の背中に隠れた。

どうやら無表情でいた自分に恐怖感を抱いているようだ。

「……ヴァレンタイン様に伝えてきました」

「すまないな。俺が伝える役目を押し付けて」

「いいえ。それは大丈夫です」

軽く言葉を交わすとフレアは

「ヴァレンタイン様の婚約者であるユニエールとの交渉、どうなさいますか？」

「……」

「噂によれば一切の交渉を嫌い厳しい性格だと聞いておりますが？」

「ああ。それはリアから聞いた」

ぽんつとリアの頭を撫でる夜叉王丸。

「リア。このお姉ちゃんに話してみる」

「は、はい……………」

リアは恐々と頷くと口を開いた。

「ユニエール様は、敵との一切交渉、しません。後、私の村で税を納められなかった人達を鞭で打って更に税を上げました」

早口にそれだけ言うとリアは再び夜叉王丸の背中に隠れた。

「……………本当にどうなさるんですか？」

かなり怖がられているようでフレアは嘆息した。

「……………さあな。ただあいつらが無事に帰れるように全力を出すだけだ」

空を見上げて答える夜叉王丸。

「……………しかし、交渉を断り戦いを挑んできたら？」

「その時は……………ヴァレンタインには悪いが剣を交える」

沈痛な表情で言葉を放つ夜叉王丸にフレアは何も言えなかった。

「・・・・・・・・」

私はリナ達を部屋に残し男爵を探しに出ていた。

ユニエールとの交渉で話しをしたかった。

私がどんなに言ってもユニエールは恐らく男爵との交渉を断り剣を抜くだろう。

そうなれば男爵も剣を抜いて血を見る事になる。

それだけは何としてでも回避したい。

ユニエールの剣なら男爵を殺し切るかもしれない。

私の目の前で男爵が斬られるなんて嫌だ。

そんな気持ちは何時の間にか出ていた。

途中で屋敷の使用人と会い男爵の場所を尋ねると今なら離れの部屋にいたと言われた。

離れの部屋は屋敷の北にありかなりの時間を労した。

部屋に辿り着いた私は心を押し付け息を整えるとドアを数回、叩

いた。

「……………誰だ？」

ドア越しから低い声が返ってきた。

男爵の声だった。

「……………ヴァレンタイン子爵です。お話があり来ました」

「……………」

少しするとドアが開き中から漆黒の服を着た男爵が出て来た。

「……………入りな」

それだけ言うと私を中に招き入れた。

部屋の中は私と与えられた部屋とは違い質素な作りだった。

簡素なベッドに薄汚れた机と椅子、傷ついた家具だけ後は何も無かった。

男爵は私に椅子を勧め自分は壁を背に腕を組んだ。

その様子から奇襲を考えての行動だと解った。

「で？ユニエール侯爵との交渉で話とは？」

左の黒眼で私を見る視線は強く逞しくそれでいて獣のような目付きだった。

「…………ユニエルは恐らく男爵様との交渉には応じません」

「……………それで」

「恐らく私を助けに来ると報告されていると思いますが、それは違います。ユニエルは……………」

一度、言葉を切る。

覚悟を決めて口を開いた。

「……………ユニエルは私を殺しに来るんですよ」

「なっ……………」

これには男爵も眼を見開いた。

「私の事を恐らく男爵様の慰み物になった娼婦と言って殺します」

ユニエルの性格なら婚約者以外の者に肌を許した淫乱女と称して私を殺すはずだ。

実際は男爵に抱かれていないがユニエルは嘘だと切り捨てるだろう。

「……………ユニエルは私を斬った剣で男爵様に襲い掛かります」

「お……………」

「私は天界に帰っても自害せず敵の捕虜になった罪で死刑確定ですから」

男爵の言葉を遮って言葉を放った。

分かっていたのだ。

敵に捕まった時点で私の人生は終わりなのだ……………
・
貴族であり部隊長の私が捕虜になるなど恥曝しも良い所だ。

それでも、あの美しく綺麗な花畑のある天界に帰りたかった。

そして男爵が何を言おうとしたのかも解っている。お前はそれで良いのか？

解ったのだ。

彼ならそう言うと言ったのだ。

僅かな時しか一緒にいないのに彼が言おうとしている事が解ってしまっただのだ。

「彼の腕は天界でも指折りです。幾ら男爵様でも勝てないです」

ユニエールと戦ったら男爵でも負けるだろう。

私ごと捕虜のために死んで良い将ではない。

私死ねばこの男と部下は助かる筈だ。

「……………だから、男爵様は私に構わずユニエー」

「……………ふざけた事を吐かしてんなよ。小娘」

私の言葉を遮って男爵が口を開いた。

「何だ？その下らない理由は？そんな理由でお前は死ねるのか？」

ギロリと私を見る瞳の強さに今まで感じた事の無い恐怖を感じた。

「娼婦の何処が悪い。身を挺して男を喜ばす良い女達だ。その何処が悪い」

壁から離れ男爵は私に近づいた。

怖い。

ただ純粹に怖いと感じた。

「仮にユニエールが娼婦を嫌ってもお前は娼婦じゃない」

男爵から離れようとして壁際に追い詰められた。

「でも、私は貴方の捕虜に……………」

視線を逸らす私に男爵は顎を掴んで強引に向かせた。

間近で男爵の黒い瞳とぶつかり、その瞳に宿る強さに眼が離せなかった。

「お前は勇敢に孤軍奮闘した。それに敬意を表し俺が招いた客人だ。捕虜なんかじゃない」

私の言葉を言い訳のように言い切る男爵。

「お前は俺の客人だ。相手が婚約者だろうがコンニャクだろうが糸コンニャクだろうが俺の客人に手は出させん」

「……男爵様」

何故、そこまで真摯になるの？

私の問いに男爵はただ

「言っただはずだ。お前は客人だと」

「良いか？ユニエールが来てお前を娼婦と罵ろうが気にするな。お前は汚れてない。清らかな身体だ。分かったな？」

「……はい」

ゆっくりと頷く私に男爵は顎を掴んでいた手を放し私から離れた。

「なら、この話は忘れる」

早口に言つと男爵は壁に掛けてあつた剣を取ると部屋から出て行つた。

「・・・・・・・・・・」

後に残された私は男爵のあまりの感情を露わにした姿と間近で見た瞳に腰が抜けて動けなかつた。

第十一話：瞳の強さ（後書き）

一気に距離が縮まりましたかね？

第十二話：交渉は決裂へ（前書き）

天魔大戦での夜叉王丸とギャップが違い過ぎてすみません。

第十二話：交渉は決裂へ

「……………ここか」

白銀の真新しい鎧を着た銀髪の青年は険しい表情で大きな扉を睨んだ。

青年の名はユニエール。

天界の軍に所属しヴァレンタインの婚約者。

ユニエールは意を決したように口から大声を張り上げた。

「天界の騎士、ユニエール侯爵。飛天夜叉王丸男爵に話あり参上した」

すぐに門番が小口から出てきた。

「来るのは分かっています。どうぞ中へ」

来るのは分かっていた？

ユニエールは何処から情報が漏れたのだろ？

首を傾げながらユニエールは腰に差した黄金の鞘に収まった愛剣を見た。

名づての加治屋に作らせ侯爵に相応しく贅を凝らした剣で幾度なく悪魔を倒した剣だ。

これで、男爵を倒して……………

ある決心をしてユニエールは開かれた扉を潜った。

「こちらでお待ち下さい」

通された客室で紅茶を出されたがユニエールは口にしなかった。

敵の出した物など飲めないし宮廷御用達の茶以外は飲まない主義だ。

暫らく腕を組んで待っているとドアが開く音がした。

視線を背後に送ると黒一色の服を着て腰まで伸びた黒の髪を後ろで結った貧相な男が入って来た。

男はユニエールと向き合うように椅子に座った。

「……………飛天夜叉王丸男爵だ」

威圧的な声と鋭い瞳を向けてきた。

『この男が………飛天夜叉王丸』

ユニエールは自分の婚約者を奪った男を見た。

黒い服は上質とは言えず髪も手入れをしていないのか剛毛だ。

明らかに皇子としても貴族としても不似合いな男だ。

「本当に男爵ですか？」

疑いの視線を送るユニエール。

「………疑うのは自由だ。こちらの用件を言う」

疑いの視線も気にせず夜叉王丸は口を開いた。

「こちらで客人として扱っている。ヴァレンタイン子爵令嬢と忠義心溢れる部下を天界に帰還させて貰いたい。勿論、帰還してから殺すなんて事は無しでだ」

客人の言葉にユニエールは驚いた。

「捕虜ではないのですか？彼女と部下は敵ですよ」

「………生憎と此方も仁義礼は知っているつもりだ」

それは我々も知性があり礼儀を護ると言っていた。

「……貴方の用件は了承しかねますね」

「……」

「私は捕虜もヴァレンタインも殺しに来たんですよ」

「……何故？と聞いても良いかな？」

懐から煙草を取り出して尋ねる夜叉王丸にユニエールは険しい表情で言った。

「敵軍に捕まり自害しないなど、貴族として恥。また上層部の命令も無視して行動するなど命令違反の兵など要りません」

「……」

「……俺の出した用件は断固として飲めない？」

「ええ。飲めませんね」

「……なら無理矢理にでも飲ませる」

「私も貴方を殺す気でしたから丁度良いです」

夜叉王丸は椅子に置いていた黒い鞘に収まった無愛想な剣を取るとユニエールに視線を送った。

「……中庭に出る」

「ええ。構いませんよ」

ユニエールは内心で笑った。

『この男、頭に血が上っている』

怒りで我を忘れていた奴ほど戦場では生き残れない。

ユニエールは長年の経験でこの勝負は勝ったと思った。

しかし、それを覆す出来事があるのをユニエールは知らない。

第十三話：侯爵対男爵（前書き）

少し男爵が感情を露にします。

第十三話：侯爵対男爵

紅茶を飲んでいたら私とリナ達は中庭から剣と剣の交わる音が聞こえてきたので行って見ると男爵とユニエールが剣を交えていた。

「男爵様！ユニエール！」

私は中庭に出ると二人の間に入ろうとしたが後ろから肩を掴まれた。

「旦那の邪魔はさせられないな」

翠眼を鋭くさせながら私を見る青年には見覚えがあった。

捕虜になる前に男爵と一緒にいた男だ。

「は、放して！ユニエールを止めないと男爵様が……………」

必死に腕を振り解こうとしたがまったく駄目だった。

「旦那があんな坊ちゃん育ちに負けるかよ」

青年は嘲笑うように私を見た。

「ユニエールは何度も武勲を立てたわ！武道会でも長年のチャンピオンだったのよ！？」

青年は少し驚いた表情をした。

「へえ。見た目によらず骨があるんだな」

「だが、旦那に比べれば雑魚だな」

見てみると顎で前を指す青年。

「……………え？」

視線を向けると地面に膝を着くユニエールを見下ろす男爵がいた。

「……………どうした？これで終わりか？」

剣を右肩に乗せて見下ろす夜叉王丸にユニエールは利き腕を抑えながら睨んだ。

「……………力も技術もあるが、相手を甘く見たのが汚点だな」

嘲笑う訳でもなく淡々と理由を述べる夜叉王丸の瞳は怒りで青白く

燃えていた。

「……殺さないのですか？」

「子爵令嬢と部下達が無事に天界に帰られるようにするなら殺さない」

「先ほども言いましたが、お断りします」

ちらりとヴァレンティンを見るユニエール。

「男爵の慰み物になった女など必要ありません」

「………ツ!!」

ヴァレンティンはユニエールに言われた言葉の刃に崩れ落ちそうになった。

「………」

夜叉王丸は何も言わずにユニエールを殴り倒した。

「ふざけるな。必要が無いだと？貴様、何だと思ってるんだ?!」

「こいつはお前に殺されるのを覚悟してたんだ。それが仕方ないと諦めていた。そんな覚悟を決めた女を汚すとは許せねえ!？」

地面に倒れて気絶したユニエールを真つ二つにしようと刀を振り上げた所で

「止める。飛天」

軍服に身を包んだフォカロルが夜叉王丸を止めた。

「お前が怒るのも解るが侯爵を殺したら子爵令嬢達を天界に帰せなくなるぞ」

「……すまなかつた」

夜叉王丸は無理矢理、押さえ込むようにして刀を収めるとヴァレンティンに向き直った。

「……婚約者を殴ったりして悪かつた」

ヴァレンティンから視線を逸らしながら夜叉王丸は謝ると中庭を後にした。

「……ゼオン」

「言わなくても分かる」

フォカロルが言葉を言うのを待たずにゼオンはヴァレンティンから腕を放し夜叉王丸の後を追った。

「……」

暫らくヴァレンティンは呆然としていたが少しすると逃げるように中庭を後にした。

「……侯爵を客室に連れて傷の手当をしてやれ」

控えていた部下にユニエールを運ばせるとフォカロルも中庭を後にした。

第十四話・これからの事（前書き）

シリアスからコメディが入ります。

第十四話：これからの事

私はリア達がいる部屋には行かずに寝室に向かってベッドに倒れ込むようにしてうつ伏せになった。

枕に顔を埋めて流れる涙と嗚咽を隠した。

ユニエールに言われた言葉が頭を過ぎった。

『慰み物になった女など必要無い』

ショックだった。

言われると解っていたのにショックだった。

否、どこかで期待していたのかも知れない。

殺されると覚悟してたのに心の片隅では彼の優しい言葉を期待していたのだ。

………だけど、彼が言った言葉は私の僅かな期待を裏切る言葉だった。

必要が無い。

彼にとっては所詮、政略結婚で知り合った娘だったのだろう。

でも私は彼が好きだった。

その内の手頃なのを取ると右手首に当てた。

『……貴方は私を想っていないくても私は貴方を想っていたわ』
心の中でユニエールに囁く。

『……さようなら。男爵』

瞳を閉じ一気に引いた。

しかし、出血の音も血を浴びた感覚もしなかった。

うつすらと瞳を開けると息を切らしたフレアがガラスの破片を素手で握り締めていた。

フレアの手からは鮮血が惜しみも無く出ていたが、フレアは気にせず私から破片を奪うと

パンツ

乾いた音が響き同時に頬が熱くなった。

打たれたのだ。

「貴方は自分で何をしようとしているのか分かっているんですか？」
「！」

フレアの顔は怒りと哀しみで満ちていた。

「貴方のために必死に心を砕いた男爵様の気持ちを踏み躪ろうとし

ていたんですよ!!」

乱暴に私の肩を掴み激しく揺さ振るフレア。

感情を露わにするフレアを見るのは初めてだった。

何時も無表情で無駄口を言わなかったからだ。

そのフレアが激しく私を叱っていた。

「男爵様は貴方と部下を帰そうと頑張っているんです。その思いを無駄にするんですか？」

「だけど、ユニエールは交渉を……………」

「交渉など幾らでもやり直しが効きます。しかし、命にやり直しは効きません!!」

「良いですか？今後、二度と自殺などという馬鹿な真似はしないと約束して下さい」

フレアが真摯な眼差しで私を見つめた。

「良いですね？」

「……………はい……………はい」

私はフレアの真摯な気持ちが嬉しくて涙を流しながら頷いた。

フレアは血で塗れた手で優しく抱き締めてくれた。

暫らくの間、私の嗚咽は止まらなかった。

「……主人、ただいま戻りました」

一人で気落ちしていた俺をゼオンが慰めているとヨルム、フェン、ダハーカが戻ってきた。

「ヴァレンタイン子爵令嬢の婚約者が来ていると聞いて……」

ヨルムが俺の表情を見て理解したようだ。

「お会いになったのですか？」

「ああ。刃を交えた」

「で、勝ったんだろ？」

ダハーカがジョーカーを吸いながら意味ありげ見てきた。

「まあ、な」

「随分と歯切れの悪い答えだな」

「侯爵の野郎を子爵令嬢の前でぶん殴ったんだよ」

俺の代わりにゼオンが答えた。

「それで落ち込んでるのか？」

「違う。子爵令嬢達を天界に帰せないから落ち込んでるんだ」

「交渉が決裂したのですか？」

「ああ。侯爵の野郎から悪魔と交渉なんて出来ないって言って子爵令嬢も殺そうとしたからな」

「なに？」

ダハーカが驚きの声を上げた。

「確かにあの侯爵なら自分の婚約者だろうが殺しかねませんね」

ヨルムは納得できるように頷いた。

「それで侯爵は？」

「客室に連れて行った」

部屋に入って来て壁に身体を預けながらフォカロルが説明した。

「今は気絶してるが、どうするんだ？」

「また交渉を持ち掛けても断るのは解り切っているだろ？」

「……………」

フォカロルの言葉に何も言えなかった。

恐らくあいつに交渉を持ち掛けても断るのは目に見えている。

だからと言って殺してはヴァレンタインを天界に帰還させる手立てが無くなる。

くそっ！！どうすれば良いんだよ!？

苛々と机を叩く俺を皆は黙って見ていた。

「……………男爵様」

ドアが開いてフレアが入って来た。

「……………どうした？」

怒りを抑えて尋ねたが顔が強張ってしまった。

「……………皇帝陛下から手紙が」

「ベルゼブルが？」

あいつが手紙を寄越すなんて一体なんだ？

「・・・・・・・・・・」

手紙を開いて読んでみると

『やつほー！！元気か？我が息子よ！フォカロルの手紙では天使の娘に豪く（えらく）熱を上げているそうじゃないか？お前が熱を上げるなんて珍しいな。まあ、俺にとってはお前が結婚するなら誰でも良いがな。早く帰って俺に紹介してくれ！？』

グシャー！！

力の限り手紙を握り潰した。

あの馬鹿親父が！！こんな大変な時に変な手紙を寄越しやがって！？

俺は何も知らないで気楽に手紙を書いたであろう魔界にいる養父を怨んだ。

「それと、ヴァレンタイン子爵令嬢の事について話があります」

「・・・・・・・・・・」

これには直ぐに怒りが治まりフレアを見た。

「話してみる」

「はい。実は……………」

フレアは少し躊躇いがちに話し始めた。

第十四話：これからの事（後書き）

感想・評価をお願いします。

第十五話：不安と期待（前書き）

更新が遅れてすみません！

第十五話：不安と期待

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜叉王丸を含め部屋の中にいた者は沈黙した。

フレアから言われた内容に呆気に取られたのだ。

それは

『ヴァレンティン令嬢を魔界に連れて行って下さい』

これには皆が眼を見張った。

『これはヴァレンティン令嬢自身からの頼みです』

話によるとヴァレンティン令嬢がフレアに

『私を・・・・・・・・・・魔界に連れて行って』

とフレアに頼んだそうだ。

これにはフレアも驚いたがヴァレンティンは

『お願い。雑用でもするから私を魔界に連れて行ってっ』

フレアは突然の事で戸惑い直ぐには返事を出せないから待っていてくれと言って返事を保留にしたのだ。

「……………どういふ感情の変化だ？」

フォカロルが腕を組みながらフレアに尋ねた。

「恐らく、侯爵に見捨てられて自暴自棄になったのではないでしょうか？」

「妥当な考えだな」

「だが、最初から侯爵が殺しに来ると分かっているのに自暴自棄になるか？」

「それは……………」

フォカロルの指摘にフレアは口籠った。

「だが、殺されると分かっても目の前で言われると自暴自棄にもなるものだぞ」

ダハーカがフレアの代わりに答えた。

「確かに。だが、子爵令嬢が本当に自暴自棄になったのか疑問だ」

「……………何が言いたいのですか？」

フレアが感情を込めた瞳でフォカロルを見た。

「自暴自棄になったと見せかけて魔界に入り皇帝、王族、若しくは飛天の暗殺を企んでいる」

「ッ!!」

フレアは目を見張った。

「強ち考えられなくもない考えですね」

ヨルムンガルドもフォカロルの考えに同意した。

「皇帝、王族、主人様を殺せば天界に勝機も出るはずです」

「………考えられなくはない考えだ」

夜叉王丸も同意の言葉を出した。

「男爵様!!」

フレアは怒りの表情で夜叉王丸を睨んだ。

「だが、それは仮定の話だろ？」

「ああ。仮定の話だ」

夜叉王丸の問いにフォカロルはニヤリと口端を吊り上げながら答えた。

「なら問題無いな。ヴァレンティン子爵令嬢を魔界に連れて行こう」

「面倒はお前が見るよ?」

「苦労しないように努めるさ」

將軍と男爵のやり取りにフレアは呆気に取られた。

さっきまでの緊張と張り詰めた空気は何だったのだ？

そんな事を思いながらもフレアは口を閉じた。

「という訳だ。ヴァレンティン令嬢の魔界行きを了承する」

フォカロルがにこやかに言うのをフレアはこめかみに青筋が立つのが分かった。

「・・・・・・・・・・」

フレアの怒りに夜叉王丸は敏感に感じ取り従者達を連れ部屋を出た。

後に残されたフォカロルはフレアの怒りを受けた。

何で、あんな事を言ったんだろう？

フレアが出て行ってから私は自分で言った言葉を思い出していた。

私を魔界に連れて行って!?

何で、私はあんな馬鹿な事を言ったんだらう?

仮にも私は天界の子爵令嬢なのに……

自分から魔界に連れて行ってくれなんて……

恐らく自暴自棄になったんだらう。

それに男爵が私を魔界に連れて行く訳がない。……. だけど、もしも男爵が連れて行ってくれるなら……. 私は…….

コンコン

ドアが叩かれる音がして、はっとした。

「……失礼します」

少しするとフレアが入って来た。

「先程、男爵様に貴方の事を話してきました」

「…….」

私はフレアの言葉に息を飲んだ。

そして答えを待ち望んだ。

男爵が駄目だと言う期待と良いと言う期待の両方の答えを……

第十五話：不安と期待（後書き）

次はもう少し早く更新します!!

逸話：二人で月見（前書き）

更新が遅れてすみません。試験勉強で遅れています。

逸話：二人で月見

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜の星空に浮かぶ三日月を見ながら私は一人で考えていた。

フレアから言われた答えは私を魔界に連れて行っても良いとの事だ。

『男爵様の客人として魔界に連れて行きます』

答えを聞いて私の中にあつた不安は一掃され嬉しさが占めた。

何で嬉しいのか解らなかつた。

自分で言っておきながら自分の行為が理解出来なかつた。

しかし、そんな小さな疑問や不安を消し去る程に今夜の月は綺麗だつた。

こんなに綺麗な月は天界でも見れなかつた。

月の放つ幻想的な光で屋敷中が輝いた。

窓から覗くと中庭にある木の下で酒を呑む男爵の姿が視界に入った。

月の光を浴びて輝く木の影に座り酒を呑む男爵はちらりと私の居る部屋を見てきた。

男爵の黒い瞳は闇の色で逸らす事も出来ずに引きずり込まれる。

男爵は人差し指で私に来いと仕草をした。

私は逆らう事も出来ずに部屋を出て男爵の元へと向かった。

中庭に出ると男爵が私から視線を外し再び月を見上げていた。

男爵の視線が外れると哀しさと安心感が芽生えた。

もつと見ていて欲しい。

否、あの瞳に見つめられ続けたら私、どうなるか解らない。

「……………宵い月だ」

男爵がぼつりと漏らした言葉。

いつもの威圧感はないが代わりに悲哀感があった。

「……………あの、男爵様」

私は意を決して口を開き男爵に近づいた。

「なぜ、私を魔界に連れて行くのを了承して下さいたのですか？」

口から出たのは本当に聞きたい事ではなかった。

「フレアからの言葉など一掃できたのではないですか？」

「……………さあ、何故かな？」

少し考えた様子で答えた男爵。

「あんたの言う通り、断る事も出来た」

朱杯に透明な液体を注ぎながら喋る男爵。

「だが、断らなかった。敢えて言うなら気まぐれ、とでも言っておこうか」

朱杯に注いだ酒を飲みながら答える男爵。

「気まぐれ、ですか……………?」

「……………ああ。気まぐれだ」

素っ気なく答える男爵。

気まぐれ、これほどまでにいい加減な言葉はない。

「ただ、この男は恐らく気まぐれなどで私を魔界に連れて行くのではない。」

天界に帰れない私を助ける為に魔界に連れて行くのだ。

そんな確信が心の中にあつた。

「……………本当に宵い月だ」

暫らく私は男爵と一緒に夜空に登る月を見続けた。

逸話：二人で月見（後書き）

新しい作品も製作中です！？

第十六話：魔界への旅路（前書き）

これで第一部は終了です。

第十六話：魔界への旅路

ゴトゴトゴト

荒道を走る馬車に乗って私と部下達は魔界に向かっていった。

月見から三日して私は魔界行きを部下に伝えた。

それを聞き部下達も

『自分達も魔界にお供します』

と言ってくれた。

男爵に部下達も連れて行ってくれと頼むと二つ返事で許してくれた。

ユニエール侯爵は思っていたよりも軽傷で済み傷が治ると天界へと護送されていった。

護送される際にユニエールから浴びせられた罵声が頭を過ぎる。

『せいぜい男爵に可愛がつて貰え！！この淫乱女が！？』

これを聞いた男爵が再び剣に手を掛けたのを私は見逃さなかった。

しかし、フォカロル將軍によって抑えられたのだ。

恐らく止めてなかったらユニエールを真っ向から斬っていただろう。

それ位、男爵から発せられた殺気は身も凍るような殺気だったのだ。怖いと正直、思った。

しかし、それと同時に私の為にここまで怒る男爵の態度が嬉しかった。

敵である私を捕虜ではなく客人として扱い脱走したのに傷の手当てまでしてくれユニエールの剣からも護ってくれた。

何故、悪魔である貴方が敵である私にそこまで義理立てしてくれるのか分からない。

けれど、貴方の真摯な態度は心から嬉しいと思った。

それと同時に私の胸の中で何かが変化した。

男爵を見ると恐怖よりも情熱が湧き出る。

声を聞くと怯えるより陶醉してしまう。

この感情が何なのかは分からない。

この感情が恋だと気付くにはまだ時間が掛かった。

第十六話：魔界への旅路（後書き）

次は4月の第二部で会いましょう。

一部終了発表

これで取り合えず一部が終了という事になりました。

本当は二部は書かないで一部で終わらせる筈でしたが、新たに物語の考えが湧いて魔界編も書く事に決めました。

現在の評価、感想は一通もありませんが読者がいるのは判ったので嬉しいです限りです。

第一部では魔界の捕虜になったヴァレンタインと夜叉王丸の出会いをテーマにして書いて見ました。

途中、誤字脱字、変な表現があつた事をお詫びします。

出会いを果たし天使であるヴァレンタインを客人として持て成す夜叉王丸とそれを世話するフレア、フォカロル。

そして速い段階で登場させましたが、婚約者のユニエールの裏切り。

天使の横暴とそれを阻止する悪魔。

哀しみと絶望に立ったヴァレンタインを優しく慰めるフレアの優しさなどを書いて見ました。

本当は真逆のパターンですが、敢えて真逆に挑戦してみました。

この小説では天魔恋物語の俺様野郎で道化師の夜叉王丸を書くのではなく無口で無表情のシリアスバージョンで書きたいと思い考えま

した。

コメディ風も考えてみたんですが、友人から『この物語ではシリアスの方が良い』と言われて思い留まりました。

この他にもシリアスな夜叉王丸は別シリーズで用意していますが、今回はヴァレンタインを先に出したいと思いました。

第二部では魔界での生活と批判、差別と少し苦手な分野も頑張って書きたいと思っています。

評価、感想をお願いします。

励みになるので……………

では、4月に第二部で会いましょう。

一部終了発表（後書き）

第二部で会いましょう。

第二部序章：魔界（前書き）

第二部スタートです。

第二部序章：魔界

「……ここが、魔界……」

私は茫然として馬車の中から男爵の故郷である魔界を凝視した。

教官からは荒れ果てた荒野で何も無いと言われていた。

しかし、目の前に広がった景色は予想外だった。

草木は伸びて太陽も昇って鳥たちも飛び回っていた。

私たちがいた天界と変わらない。

「……やっぱり驚いてるな」

いつの間にか先頭にいた男爵が私の乗った馬車の隣にいた。

「お前さんの故郷と対して変わらない」

私の考えを読んだように答える男爵。

「まあ、住んでる奴は変わるがな」

何所か嬉しそうに喋る男爵。

いつもなら威圧的な口調と眼差しで畏怖の存在だが、今は子供のよ
うな感じだった。

やはり故郷に帰れるのは嬉しいのだろう。

私も……天界に帰れたら……

かつて住んでいた楽園。

しかし、もう私は天界に戻れない。

魔界で暮らすと自分で決めておきながら、この身は楽園への帰還を夢見ていた。

「……どうかしたか？」

私の表情を瞬時に読み取って訪ねてくる男爵。

「……いいえ。何でもありません」

私は静かに首を振った。

「……分かった」

男爵はそれだけ言うと先頭に戻って行った。

その後姿を見て私は静かにため息を吐いた。

私の命を救って天界に帰還させようと尽力してくれた男爵。

男爵を思っただけで私の胸は焼けつき張り裂けそうな位に痛む。

なぜかは解らない。

この胸の痛みが何なのか私を知るのはまだ先・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

第一話：北の都

魔界に着いた私たちは北の都に向かった。

北の都に男爵の養父、蠅王ベルゼブルが政務で滞在しているそうだ。

私と部下を乗せた馬車が少し揺れた。

しかし、その揺れはタイルやレンガの道を走っていると理解した。

窓から見える景色は天界の町並みと大して変わらなかった。

市場があり民が混雑して子供達が走り回っていた。

景色を見ながら過ごしていると馬車が止まった。

耳を澄ませると男爵の声が聞こえてきた。

「飛天夜叉王丸男爵っ。皇帝ベルゼブルに会いに参った。開門!？」

城に着いたようだ。

扉が開く音と共に馬車が再び動き出した。

城の中に入ると暫くして馬車から降りるよつに言われたので降りた。

そして城内に入ると男爵とフォカロル將軍が先導して私を案内した。

部下たちは男爵の部下と一緒に別の部屋に向かったようだ。

着いた場所は大広間並みの客室。

「ここでベルゼブルが来るのを待つ」

どかりとソファーに座る男爵とフォカロル將軍。

「・・・適当に座れ」

顎で命令する男爵。

進められるまま近くの椅子などに座っていると数人のメイドが来て紅茶と茶菓子を置いた。

私たちの顔を見ても驚きもせず淡々とこなしていた。

男爵も用意されたコーヒーに手を出したが、そのまま飲まずに用意されたミルクを入れ始めた。

対してフォカロル將軍は黒いまま飲んだ。

「……なんだ？」

視線に気づいた男爵が私を見た。

「い、いいえっ」

「お前がミルクを入れるのを見て驚いてるんだよ」

フォカロル將軍が愉快そうに言った。

「俺が？」

「お前が見た目と違って可愛いからさ」

けたけたと笑うフォカロル將軍。

「うるせえな」

不機嫌そうに顔を歪める男爵。

私には見せた事のない軽い口調だった。

そんな男爵とフォカロル將軍の会話を聞いているとドアが開いた。

皆の視線がドアに向かう。

「よお。飛天」

中に入ってきたのが、ベルゼブル皇帝だと一目で分かった。

二人の屈強な体格をした護衛を二人連れて王だけが持つ独特の威厳があった。

肩まで伸びた艶のある黒髪、月を思わせる怪しき光の瞳。

地獄帝国を統べる皇帝にぴったりの容姿と雰囲気溢れだしていた。

「よお。ベルゼブル」

ソファーに座ったまま片手を上げる男爵。

それと違いフォカロル將軍は片膝を付いて臣下の態を取った。

「仕事は終わったのか？」

「ああ。だから来た」

男爵の皇帝に対する態度はとても良い態度とは見えなかった。

しかし、皇帝は気にしていなかった。

「……そちらが、ヴァレンタイン子爵令嬢か？」

ちらりと私を見る皇帝。

見られただけで、全身に震えが走った。

「……は、はいっ。ヴァレンタイン子爵令嬢です」

震える身体を抑えながら私は立ち上がって貴族令嬢として恥ずかしくないように答えた。

「……なるほど。飛天が熱を上げる訳だ」

「え？」

私は何を言われたのか理解できなかった。

男爵が熱を上げる？

私に？

「なに馬鹿な事を言ってるんだ？お前は」

後ろから男爵の不機嫌な声とともに皿が飛んできた。

しかし、皇帝の額に当たらずに皿は左を護っていた護衛に止められた。

「……飛天。やり過ぎだぞ」

皿を受け止めた中年の男が男爵を睨んだ。

「そいつが悪いんだよ」

しれっとした態度で答える男爵。

「何だよ。フォカロルの手紙では熱を上げていると書いてあったぞ」

「フオカロル!!!」

「本当の事だろう？他人に世話焼きなのはお前の性格だが子爵令嬢の場合は、もう恋人みたいなものだろ？」

「「こ、恋人!？」」

私と男爵ははもってしまった。

「俺が知らないとも思ってたか？」

「お前らが満月の夜に中庭で逢い引きしてたのを見てたんだぜ？」

意地悪な笑みを浮かべるフオカロル将軍。

「「逢い引き!？」」

二人の護衛が素っ頓狂な声を上げた。

「月の夜に逢い引きとは乙女心をくすぐるな」

皇帝は手を顎に当てて頷いた。

「流石は俺の息子だ。こんな美人な娘を恋人にするとは……
孫の誕生が楽しみだ」

そんな事を言いながら皇帝は椅子に座った。

「誰も結婚なんてしない。こいつは何れは天界に返す」

男爵の言葉が胸に響いた。

交渉が決裂したのに、まだ私を天界に返そうとしていたんだ。

そう思うと胸が痛くなった。

「交渉が決裂したのにか？」

「交渉なんて何回でもやり直しが効く」

「ずいぶんと前向きだな」

皇帝は愉快そうに笑った。

「お前は子爵令嬢を返したいが、果たして子爵令嬢本人はどうかかな？」

金色の双眸で私を見つめる皇帝。

男爵の瞳と違って威圧感はなく安堵の雰囲気を感じて心を許してしまっそう。

「どうだい？ヴァレンタイン令嬢。天界に帰りたいか？」

「私は……………」

言葉に詰まる。

心の何所かで天界に帰りたいと思う私が出た。

しかし、同時に男爵のいる魔界に残りたいと思つ気持ちもあつた。

両方に板挟みされ私は迷つた。

「……………まだ、決心が着かないようだな。それならまだ大丈夫だな」

小さく何かを言つた皇帝。

「……………何を企んでいる」

男爵が眉を顰めた。

「さあ？何だと思つ」

皇帝は気にしないとばかりに笑つた。

そんな事で私は魔界入りを果たした。

第二話：エギユン王

魔界北部の都、ヴィルナール。

ここは魔王、エギユンが支配している都で鉱石出資率が一番だと男爵から教えられた。

私と男爵が戦った場所から差して遠くない場所で天界にも近い。

都を治めるエギユン王は男爵と年齢がさほど変わらず友人同士らしく天使である私の宿泊を快く了承してくれた。

皇帝と面会を済ませた私は与えられた客室で寛いでいたが皇帝と一緒に食事をしようと言われた。

断る訳にもいかないので現在、フレアにドレスや飾属品を選んで貰っていた。

「……このドレスなど如何でしょうか？」

無表情で渡されたのは派手すぎず地味すぎないシンプルな緋色のドレス。

「ええ。これで良いわ」

無難なドレスだと思い頷いた。

「では次に飾属品を……」

木箱に入った色とりどりの宝石類を見せるフレア。

「よお。飛天つ。元気だったか？」

俺が客室でフォカロルとチェスをしていると黒の礼服を着た同い年の男が入って来た。

「・・・久しぶりだな。エギユン」

俺が片手を上げると奴も片手を上げて手を叩いた。

こいつとは酒を飲む仲でよく二人で城下に降りて酒場で酒を飲んでいる。

今回の件でもいち早く俺に協力してくれた。

「お久しぶりです。エギユン王」

フォカロルは立ち上がって一礼した。

「お前が客人を連れて来るとは珍しいな」

エギユンがソファアに座りながら見てきた。

「しかも、あんなに毛嫌いしていた天使の娘を、な」

どこか含みのある笑みを見せるエギユン。

「……まあ、色々とな」

言葉を濁すとエギユンは何も言わずに肩を竦めた。

「お前も難儀だな」

「まあな」

二人で苦笑し合う。

「……食事の準備ができました」

フレアが入って来て食事の準備ができたと伝えてきた。

「もう時間か」

懐から懐中時計を取り出して時間を見る。

「思ったより時間が掛からなかったな」

「何がだ？」

エギユンが首を傾げた。

「ヴァレンタイン令嬢の着替えの時間ですよ」

フォカロルがニヤリと笑いながら説明した。

「なるほど。そういう事か」

エギユンがフォカロルの表情で理解したようだ。

「お前もどうして中々……」

「何の事だ？」

首を傾げてみせる。

「くくくくつ。とぼけやがって」

エギユンは愉快そうに笑いながら部屋を出て行き俺とフォカロルも慌てて後を追った。

第三話：魔界での夜

皇帝と夕食をした私は常に緊張していた。

皇帝以外にフォカロル將軍、エギユン王、男爵というとんでもない面子で緊張が解ける筈がなかった。

更に皇帝が私に何かと話し掛けてきて

「式はいつ挙げるんだ？」、「子供はいつ出来るんだ？」、「もうしたのか？」、「こいつの何所に惚れたんだ？」

と恥ずかしい事ばかりを質問してきたのだ。

その度に私は顔を熱くさせ男爵が皇帝を叱り付けた。

“こいつは何れ天界に帰す”

と皇帝に言った男爵。

その言葉が私の胸に深く突き刺さった。

何でそんな事を言うの？

自分の心の奥底から理解できない感情が出てきた。

私は天界に帰りたいんじゃないの？

男爵様の気持ちは踏みにじるの？

その思いとは逆に

此処に残れば男爵と一緒に居られる。

魔界に残りたい気持ちが折り混ざっていた。

「……………私の想いはどっちなのかしら？」

誰も居ない部屋で私は小さく呟いた。

夕食が終わり寝室に戻ろうとした所をベルゼブルに呼び止められて書齋に招かれた。

澁々ながら一緒に行くと奴は唐突に切り出した。

「ヴァレンティン令嬢を妻にしろ」

「……………んだと？」

俺は怒りを抑えた。

こいつは何を言っているんだ？

夕食の席で天界に帰すと言ったのに。

「あの娘、お前に気があるようだしお前も満更ではないんだ。結婚しても良いだろ？」

机に座りながら立っている俺に金色の瞳で見上げるベルゼブル。

「断られるのを心配してるなら大丈夫だ」

眉間に皺を寄せる俺に笑い掛けるベルゼブル。

「ヴィス公爵とかいう狸が境界線を越えて魔界の資源を奪った罰としてヴァレンタインを花嫁として寄こせと言えば良い」

「証拠もあるし、こつちに勝利はある」

誘うような声は全てを委ねたくなるような甘い響きだった。

「……俺にそんなセコイ真似をしると？」

ギロリと睨むとベルゼブルは肩を震わせて笑った。

「流石だ。それでこそ俺の息子だ。欲しい物は全てを手に入れたい。その貪欲なまでの欲望は素晴らしい」

「…………ふん」

凶星を指されて俺はふて腐れた。

欲しい物は、その全てを手に入れたい。

女なら身体だけでなく、心も自分の物にしたい。

それをベルゼブルは見越して俺を挑発するような真似をしたんだ。

「……………相も変わらず恐ろしい奴だ」

改めて自分の養父の恐ろしさを身に染みだ。

第四話：魔界での朝

朝日がカーテンの隙間から入って部屋を照らした。

「・・・・・・・・」

ここが魔界だなんて信じられない。

普通に太陽が昇るなんて知らなかった。

何時も夜の世界としか聞かされてなかったから。

だけど、魔界にも太陽がある。

作ったのは神ではなく、かつて神の右腕として名を馳せた墮天使ルシュファアの力で造り上げたのだ。

そして何もない荒野だった世界を草木が生え太陽もある世界へとルシュファアと一緒に魔界に堕ちた天使たちが造り上げた。

信じられなかった。

ルシュファアがどれだけ凄くても神と同じ物を作り上げるなど出来ないと思っていたのに、彼は・・・・彼らは成し遂げたのだ。

暫くの間、余韻に浸っているとドアを叩く音が聞こえた。

ドアが開き中にフレアが入ってきた。

「……起こしに来ました」

私が起きているのを確認してもフレアは無表情だった。

「……昨夜はよく眠れましたか？」

「ええ。とてもよく眠れたわ」

「左様ですか。それは何よりです」

フレアは無表情だったが、声には親しみの色が混じっていた。

最初の頃に比べてフレアとは仲良くできたと思う。

無表情なのは変わらないが、それでも仲良くなった。

「今朝も皇帝陛下が食事に誘っています」

私の脱いだ衣服を折り畳みながらフレアは喋った。

「皇帝が？」

「昨夜の会食で貴方の淑やかな態度と男爵が熱を上げるのに興味を惹かれたそうです」

淡々と理由を述べるフレア。

「ちなみに男爵様とフォカロル將軍、エギユン王はまだお休み中の為、皇帝と二人だけです」

皇帝と二人だけ………

昨日の会食で皇帝と眼が合った時の幻影が浮かんだ。

何も汚れを知らない純粹で綺麗な色をした瞳。

今まで戦った悪魔のように禍々しさも狂気も無かった。

あるのは………ただの純粹さ。

ただ純粹に欲望に忠実な瞳だった。

だから、怖かった。

損得で動く悪魔よりも、ただ純粹に罪を犯す悪魔の方がずっと怖い。

そう感じた。

そして、だからこそ皇帝は全悪魔を支配できるのだ。

純粹だから、純粹に攻撃するから、純粹に相手を殺すから、罪と思わないから………

「……ヴァレンタイン様？」

「……は!!」

フレアが心配そうに見てきた。

「大丈夫。何でもないわ」

間を置かずに答え皇帝との会食を了承した。

「……………宜しいのですか？」

ここで断つたら、何かされるかも知れないと考えて出した結果だ。

「ええ。皇帝に伝えて下さい」

「……………畏まりました」

フレアは一礼して一度退室した。

「……………」

一人のこつた私は自分で言った言葉の重さに後悔したが、諦めて覚悟を決めた。

第五話：朝の食事

「…………おはようございます。皇帝陛下」

薄い青色のドレスに身を包んだ私は行儀よく皇帝に頭を下げた。

「おはよう。ヴァレンタイン令嬢」

長いテーブルの端っこに座った皇帝は機嫌良さそうに挨拶を返して来た。

「さあ、座りなさい」

進められるまま着席する。

「昨日の赤髪と同じ色のドレスも似合うね」

「…………恐縮です」

俯いたまま答える。

視線を合わせたくない一心で俯いた。

「ふふふふ。恥じらいがあって可愛いね」

飛天が熱を上げる訳だと笑う皇帝に私は赤面した。

「まあ後は食事をしながら話そうか」

皇帝が指を鳴らすと数人のメイドが食事を持って部屋に入って来た。

「……………失礼します」

メイド達は食事を置くと一礼して部屋から出て再び皇帝と二人だけになった。

「優秀なメイド達だろ？」

「……………はい。無駄な動きがなく洗練されていました」

言葉を選びながら相槌を打った。

「流石は中央貴族の娘。言葉を選んだ褒め方だね」

「田舎貴族のヴィス公爵とは雲泥の違いだ」

「……………ヴィス公爵を知っていたのですか」

私は更に俯いた。

ヴィス公爵……………魔界の境界線を守る地方貴族。

私が捕虜になった時には討ち死にしたと聞いた。

死人を悪く言いたくないけど余り良い噂を聞かない貴族だった。

定めた税以上を領民に掛けて重労働をさせたらしい。

取り上げた税は中央に取り繕う為だと聞いた。

更に境界線を越えて魔界の資源に手を出して攻められたと聞いた。
もちろん敵の嘘だと思っていた。

だけど、もしも本当だとしたら？

天界の地方とはいえ貴族が魔界の領土を侵した。

明らかな領土侵略で戦争が起きても可笑しくない。

しかし、天界が無断で領土侵略をしたと分かれば勝敗は分かり切っている。

私はこれからの事を思い青ざめた。

「……どうやら事態を察したようだね」

皇帝が何所か愉快さを含んだ声で尋ねて来た。

これからの事、つまり魔界と天界の戦争が起きるかもしれない。

こちらが条約違反して侵略したとなれば同盟国も必然と離反して牙を剥くかもしれない。

幾ら悪魔が敵でも条約を破った天界に味方するなど、有り得ない。

• • •
だけど、噂だけで戦を起こす程この皇帝も馬鹿な真似は……

「君は聡明だけど、少し俺を……悪魔を甘く見ているよ」

部屋の空気が一変した。

肌寒く、戦慄を覚える、空気。

それを発しているのは七つの大罪、“暴食”の悪魔。

………蠅王、ベルゼブル皇帝。

「たかが、噂だと思っているようだけど事実だよ」

それまでの声、態度とは打って変わって冷酷で威厳ある声と態度に変わった。

「飛天の舎弟が魔界の資源を略奪している事を知った土地の村人を皆殺しにしたヴィネ公爵の手から逃げたという天使の娘を一人だけ見つけた」

皇帝の口から出された言葉に私は震えた。

恐れていて信じたくなかった事実。

まさか、自分の民を殺すなどしていたとは………

俯く私に語り掛ける皇帝の声に私は震えた。

「まあ、天界は嘘だと言うだろうけど、果たして同盟国はどうかかな？」

ニヤリと口元を歪める姿は悪魔の帝王だった。

「・・・・・・・・・・」

私は何も言えなかった。

皇帝の言いたい事が手に取るように解ってしまったからだ。

天界が嘘だと言っても噂を止める事は出来ない。

同盟国も今頃は噂が広まり混乱しているだろう。

「まあ、俺としては今更あの胸糞悪い天界を占領する気は無いよ。だけど・・・・・・・・・・」

そこで一度、言葉を切る皇帝。

「魔界の領土を侵し無実の罪を擦り付け喧嘩を振って来たなら戦も厭わない」

本気の声だと分かった。

この悪魔皇帝は本気だ。

本気で天界が戦を仕掛けるなら本気で受ける。

「・・・・・・・・・・私にどうしろと?」

私は震える唇を何とか開いて尋ねた。

ここまで言うのだから、何か魂胆がある筈だ。

「いや、特に何にも期待も要求もないよ」

しかし、返ってきた言葉は以外だった。

顔を上げるとさっきまでの歪んだ顔はなかった。

真剣な顔は変わらなかったが恐怖は感じなかった。

「話した通り今の状態は非常に危険だ。本当に戦だって起きるかも知れない。今までにない大戦争が……………」

「そんな危険な状態にありながら、飛天は君と部下たちを天界に帰そうとしている」

「それに君は知らないと思うから言うけど、あいつ元人間だから敵が多いんだよ」

「今も命を狙われてるよ。天界からも魔界からも……………」

その話を聞いて私は何も言えなかった。

自国の魔界からも命を狙われているなんて……………」

「まあ、俺の養子だし英雄だから簡単にはやられないけど、今回……………君を客人として魔界に連れて来たから変な噂が広まったんだ」

“成り上がり皇子が天使に熱を上げている”

皇帝の言葉が私の胸に深く突き刺さった。

「この噂を武器に飛天を排除しようと、動いている奴らがいる」

「……そんな自分が危険な状態でありながら君たちの為に頑張っているから、君たちもそれなりの覚悟を持って魔界で過ごして欲しい」

その眼差しは悪魔でも皇帝でもない、一人の息子を想う父親の眼差しだった。

「……分かりました」

私は丁寧に頭を下げた。

皇帝がここまで男爵を想っていたとは……

私は胸が一杯だった。

その後は何事もなく朝食を終えて退室した。

第六話：遠くない未来

「……あいつに何を吹き込んだ？」

俺はベルゼブルの胸倉を掴んで尋ねた。

正午にフレアからヴァレンタインの様子がおかしいと聞かされベルゼブルと朝食を共にしたと分かった。

直ぐにベルゼブルが何かしたと感づいて着替えを済ませて執務室に押しかけ今に至る。

「乱暴な聞き方だな」

ベルゼブルはニヤニヤしていた。

こいつが笑う時は自分の思い通りになった時だ。

「俺はただ子爵令嬢に狸公爵の悪行を伝えただけだ」

両手を上げるベルゼブル。

「嘘つけ。何か他にも言っただろ」

ギリギリと締め上げる。

「そこまで怒るとはかなり重症だな」

ベルゼブルはニヤニヤと笑いながら俺を見て来た。

ちっ。むかつく奴だ。

「……………けっ」

俺はベルゼブルから手を放すと背を向けドアに向かった。

「なんだ？帰るのか？」

「……………お前が知った事じゃないだろ」

苛立った口調で答えると乱暴にドアを開けて部屋から出た。

くそっ。気に食わねえ。

あいつの手の平で踊らされているようで……………

実際、本当にあいつの思惑に事が進んでいるのかも知れない。

あいつは、ヴァレンタインを天界に帰す気は無いだろう。

瞳の中に隠してあった純粋な欲望が映っているのを俺は見逃さなかった。

だが、あいつの思い通りになるほど馬鹿でも従順でもない。

「……………あいつは天界に帰してみせる」

例え、この身があいつをどんなに欲しようとか心が手に入らないなら手放す。

「……心が手に入らないなら、ただの人形を抱くのと同じ事だ」
そんな女を抱く位なら自分の手の届かない所に放った方がマシだ。

「つくづく悪になり切れない男だぜ」

自分の情けなさに心底、呆れながら俺は自室へと足を運んだ。

「……果たして本当に悪になり切れていないかな？」

飛天が廊下で言った言葉を水晶玉で見ながら俺は執務室で煙草を蒸かした。

「お前自身が思っているほど、お前は自分の悪に気づいていない」

奴は好きな女の心まで手に入れたと言っている。

それは貪欲なまでの恋心。

天界のくそ神は罪だと言っているが、俺は間違っていると思う。

見かけだけの恋などより欲望溢れる恋の方が素晴らしく本当の恋だ。

あいつはヴァレンタインを天界に帰そうとしているが、ヴァレンタインの方は帰りたくない様子だった。

朝食の時に俺が少しかまを掛けたら動揺した。

あれは恋をした乙女特有の反応だった。

朝食の時に言った噂は本当だけど誰も大して気にしていない。

事実、何人かの悪魔も天使と恋仲で墮天して夫婦になった奴らもいるし。

飛天を暗殺しようとしている奴らは数百年も前にあいつが全員を皆殺しにして片を付けたから心配する事はない。

あるとしたら、あいつとヴァレンタインを

「……これからどうやってあの二人をくっ付けるかな？」
心配するのはそれ位だ。

あの二人なら良い夫婦になるだろう。

飛天の捻くれた性格もヴァレンタインの力で何とかなるだろう。

あいつ変に捻くれて優しいからな。

しかもヴァレンタインみたいなお嬢様育ちには滅法世話焼きだから大丈夫だろう。

後は、元気な孫を作ってくれば文句なしだ。

出来ればヴァレンタインに似て可愛い女の子が良いな。

あいつみたいな男の子は入らん。

まあ飛天が何か言ってくるかも知れないが、あいつの望み通り心も手に入れられるようにしてやるから問題ないだろう。

「……はあー、俺って息子思いの良い父親だよな」

飛天が聞いたたら間違いなく

『誰が息子思いの良い父親だ!?!』

と怒るだろうな。

「くくくくくつ。これからが楽しみだ」

二人が結婚するであろう遠くない未来を思いながら俺は紫煙を吐き出した。

第七話：ドス黒い欲望

「……………男爵様」

怒りの気を放しながら廊下を歩いているとヴァレンタインが後ろから声を掛けてきた。

「……………」

俺は怒りの表情を見せなくなかったから振り返らずに尋ねた。

「……………何だ？」

背後でヴァレンタインが怯えたのを感じ取った。

ちっ、女を怯えさせるなんて男のする事じゃない。

「あ、あの……………申し訳ありませんでした!!」

いきなり頭を下げるヴァレンタインに俺は目を見遣った。

こいつは何を謝ってるんだ？

一瞬、首を傾げたが直ぐにピンときた。

ベルゼブルに何か吹き込まれたな。

「……………朝食の時に貴方のお義父上様から聞きました」

やっぱりあの義親父……変な事を言いやがったな。

「男爵様が魔界の民衆を助ける為に挙兵したのを……………」

そして、と言葉を一度きった。

恐らく狸親父の所業も知ったのだろう。

「……私達、天界に否があつた事も……………」

「……………」

切ない声を漏らすヴァレンタイン。

俺は黙っていた。

ヴァレンタインの声は洗練され汚れを知らない純粋な声色。

しかし、汚れを知らない声は男を知らない事を教えていた。

男を知っている女の声は妖艶な音が入っているが男を知らない女の声は純粋な音が含まれている。

辞めろ。そんな声を出すんじゃない。

その声を聞くと抑えていたドス黒い欲望が沸き上がってくる。

純粋な声を妖艶な声に変えたい。

その綺麗な身体をずたずたに、無茶苦茶にしてやりたい。

何を考えている。こいつは天界に帰る身だ。手なんか出せるか。振り向いてヴァレンタインを抱き締めたい気持ちを必死に抑える為に腰に差していた刀から小柄を抜いて躊躇せずに左手に刺した。

一瞬、鋭い痛みが走ったが大して痛みはなかった。

そして欲望を抑えられる内に

「……お前は何も知らなかったんだ。気にする事はない」

早口に言うと早足でその場を立ち去った。

くそっ。ベルゼブルが余計な事を言うからこんな目に会ったんだ。

手から血が滴り落ちてきたが気にせず歩き続けた。

男爵が立ち去ったのを見て私は黙って見ているしかなかった。

怒っているのが分かった。

だって、声がいつも以上に低くて、顔も合わせようとしてくれなかったから。

「……………男爵」

私はポツリとその場に残されて立ち尽くしていた。

第八話：魔界での生活

魔界の北地方の都で暮らし始めてから一週間が経った。

皇帝陛下は政務の件でここに来ているが後ひと月もしたら首都、万魔殿に帰る。

その時に私も男爵と一緒に万魔殿に向かう。

男爵は万魔殿に屋敷を構えている事から私も同行する事になっていて勿論、部下たちも一緒だ。

部下たちとは別々の部屋で暮らしていて中々会えないがフレアが逐一報告してくれた。

報告では魔界での生活に慣れ始めているようで一先ずは安堵した。

「……本当に魔界だなんて信じられない」

私は朝食を一人で取り終えてからは与えられた一室から外の景色を眺めていた。

フレアからは城内を自由に散策しても良いと言われたが、一人で散策する気にもなれずに部屋の中で景色を眺める事にした。

暫く景色を眺めているとドアを叩く音がした。

「……はい。どうぞ」

入るのを促すと城の主人であるエギユン王が入って来た。

「……………エギユン王」

私は椅子から立ち上がり頭を下げた。

「おはよう。子爵令嬢」

エギユン王はニッコリと笑って私に近づいてきた。

「この生活で困った事はないかな？」

「はい。何もありません」

私の返答に満足そうに頷くエギユン王。

「それは良かった。ところで、これから時間はあるかな？」

「……………時間ですか？」

「あいつ……………飛天の事で少し話があるんだ」

「男爵様の？」

「皇帝と朝食をした時に飛天の事を聞かされなかったかい？」

「……………はい。聞かされました」

嘘を吐く訳にもいかないので本当の事を言った。

「その事で話しがあるんだ」

「……分かりました」

私は頷いた。

私が頷くのを見て一瞬、エギユン王が表情が歪んだのを私は見落とした。

ヴァレンティンを客室にエスコートしながら俺は意図も簡単に罠に引っ掛かった獲物に内心ほそそ笑んだ。

これだから恋する女は騙し易い。

好きな相手の事を出せば直ぐに食い付いてくる。

皇帝から言われた言葉を思い返す。

“ヴァレンタインを天界に返させるな”

話によると飛天が熱を上げていながら自分の心を押し殺してヴァレンタインを天界に帰そうとしているらしい。

『欲望に忠実な悪魔が欲望を抑えるなど言語道断だ』

と建て前は立派だが本当は恐らく

『飛天が熱を上げているなら、ここで二人をくっ付けて結婚させてしまおう』

というのが本当だろうな。

皇帝もサタン様も娘、息子が年頃なのに結婚しないから孫が抱けないと嘆いていたからな。

今回の件で皇帝は何としても二人を結婚させるだろうな。

まあ、別な目的で天界の貴族令嬢が魔界の皇子と結婚したとなれば天界の威厳も落ちると考えてだろうが………

……まあ、俺の場合は命令もあつたが、あいつが好きな相手を諦めるなんて事はして欲しくないから協力したんだがな。

あいつもそろそろ結婚しても良い歳だしな。

飛天がいたら鉄拳の一発でもお見合いしてくるだろうが、友を想う気持ちに偽りはないからな。

そんな事を思いながら俺は歩を進めた。

第九話：天使殺しの実態

エギユン王に案内されて客室に入った。

「まあ、掛けて」

エギユン王に促されて着席する。

私が着席するとエギユン王も着席した。

「さて、と何から話せば良いかな？」

足を組んでエギユン王は私を見つめた。

年齢は男爵と同じだった筈だが見た目は男爵よりも若干だが若く見えた。

男爵の黒髪黒眼とは対照にエギユン王は金髪の碧眼だった。

「俺の顔がどうかしたかな？」

「い、いえ。何でもありません」

慌てて視線を逸らした。

「可愛い反応だね。まるで小猫みたいだ」

クスクスと笑いながらエギユン王は足を組み直した。

「ま、冗談はこの辺にして飛天の事を話そうか」

真顔になった王に私も真剣になった。

「先ず最初に飛天の異名は知っているよね？」

男爵の異名なら小さな子供でも知っている。

「・・・隻眼の天使殺し」

私は小さな声で答えた。

「隻眼の天使殺し・・・・・・・・それが男爵様の異名です」

その名前を出せば屈強な武将、騎士でも震え上がる。

一振りで数百人の天使を斬り殺し、ありとあらゆる魔術で城壁を破壊し助けを懇願しても無情に首を撥ねる冷酷無情な悪魔。

それが天界で語られる男爵の噂。

「天界の言ってる事も間違いじゃないね」

エギユン王は静かに話し始めた。

「馬鹿みたいに強いし冷酷な一面もある。だけど、あいつは心から冷酷無情じゃないよ」

「部下思いで女子供には優しいし決闘を申し込まれば一対一で闘うよ」

君が知っているだろ？

とエギユン王は言葉を含んだ。

確かに。私は男爵を知っている。

あの時、男爵と対峙した時に私は決闘を申し込んだ。

そしたら男爵は受けて立って一対一で戦ったが物の数分で私は敗北して捕虜になった。

私の部下にも優しいし自分の部下からも信頼されている姿を見て私たちの噂が嘘だと解った。

「まあ、飛天と戦った君に話しても意味はなかったかな？」

苦笑して私を見るエギユン王。

「いえ。そんな事ありません」

「ありがとう。優しいね」

笑顔を向けるエギユン王に私は不覚にも赤面した。

「どうしたの？顔が赤いけど？」

「い、いえっ。何でもありません」

私は顔を背けた。

「…………ふふふ」

エギユン王は愉快そうに笑いながら席から立ち上がるのを私は感じた。

「実に可愛い反応だね」

愉快そうに笑いながらエギユン王は私のさり気無く私の髪に触れた。

「ッ!!」

私はビクッと反応してしまった。

男の方に髪を触れられたのはユニエールしかいなかった。

「綺麗な金色の髪だね。まるで気高い月のようだ」

エギユン王の手は優しく香りの良い匂いがして抵抗する力を奪い意識も朦朧としてきた。

「…………君、飛天をどう思う?」

エギユン王の質問に私は朦朧とする意識の中で答えた。

「…………男爵様は、とても優しく強い方だと思います」

「男としてどう思う?」

「…………とても良い、人だと思います」

「全てを捨ててでも一緒になりたいと思う? 故郷を捨てても 」

「 私は、全てを捨てても 」

朦朧とした意識を私は手放した。

何と答えたのだろうか?

私は自分の答えを考えながら深い眠りに入った。

ヴァレンタインが眠つたのを確認して俺は懐から葉巻を取り出して火を付けた。

俺が催眠効果のある香水を付けて質問したらヴァレンタインは素直に答えた。

そして魔界に住む気はあるのか聞くと朦朧として声で

『全てを捨ててでも、男爵様と添い遂げます』

とはっきりと答えた。

これを言っつてヴァレンタインは眠った。

この答えから察するにヴァレンタインは飛天と一緒にになるなら墮天も辞さない事が分かった。

まあ、これなら何とかなるだろう。

問題なのは………

「飛天の奴をどうしたらヴァレンタインを天界に返さないと言わせるかだな」

あいつの性格からして有言実行しそうだから時間が無い。

何とか俺の治める土地で片を付けないと不味いな。

万魔殿には何かと頭の固い堅物の年寄りが居るからな。

「さて、どうしたら良いかな？」

俺はあれこれ思案を巡らせながら紫煙を吐き出した。

第十話：お前を護る

「……………ここは？」

目を覚ますと見覚えのない部屋のベッドで寝ていた。

周りに視線をやると質素なテーブルに椅子、小さな本棚だけが置かれた殺風景な部屋。

「……………気が着いたか？」

声の方を向くと黒い服を着た男爵が立っていた。

「お前が広間で眠っているのを見つけたから連れて来た」

淡々と説明する男爵。

「ここは男爵様の部屋だったんですか」

「お前の部屋に運ぼうとしたが掃除中だから俺の部屋に連れて来た」

男爵は空いている椅子に座り煙草を取り出した。

しかし、直ぐに懐にしまった。

「……………吸わないんですか？」

「女の前では吸わない」

煙草を嫌う女性は多い。

私も嫌いだと思えば男爵は気を遣ったのだ。

「私は大丈夫ですから吸って良いですよ」

本当は嫌いだ、男爵に気を遣われなくなかった。

「いや。気分がなくなっただけからいい」

私を見ずに男爵は断った。

「……………」

「……………」

互いに言葉を言わずに沈黙が流れた。

話しめせずに男爵はただ窓の外を眺めていた。

どれくらい時間が経ったのだろうか？

私は沈黙に堪えられずにある事を尋ねた。

「…………部下達は、どうしてますか？」

魔界に来てから部下達とは接触していない。

恥ずかしいが今まで忘れていた。

「お前の部下達は……天界に行った」

「えっ？」

自分の耳を疑った。

何で天界に？

「お前を天界に帰す為に俺の仲間と一緒に رفتんだよ」

説明を加える男爵。

私に言わなかったのは私だけを置いて行くのに罪悪感を感じたからだろう。

「……そうですか」

「だから、気を付ける」

男爵の言葉に首を傾げた。

何を気を付けるの？

「お前が死天使であることを知っている奴らがお前を殺そうとしていると聞いた」

「ッ！！」

男爵に指摘されて気づいた。

ここは魔界。

そして私は悪魔の天敵とも言える死天使。

私を殺そうとしている者たちの巣窟であることを忘れていた。

そして部下たちは天界へと行っていて私しか居ない。

「……心配するな」

青ざめる私に優しい言葉を掛けた男爵。

「お前は俺が護ってみせる」

え？

私が男爵を見ると男爵は視線を逸らしながら

「お前は俺が護ると言った。だから、心配するな」

と言った。

ぼんっ

思わず私は赤面してしまった。

恐らく女なら一度は言われてみたい言葉だろう。

「……ちっ。俺の柄じゃないな」

男爵が小さく舌打ちするのも気づかずに私は惚けていた。

だって、今まで生きて中で男の人にそんな事を言われた事がなかったから………

しばらく私は惚けていて男爵が部屋を出るのも分からなかった。

登場人物紹介

名前：飛天夜叉王丸男爵

性格：有言実行者、俺様、気まぐれ、捻くれ者

年齢：二千八百歳

容姿：黒の長髪（腰まで）、不精髭、黒の眼帯（右）、黒の瞳（左）、褐色の肌

要約：人間から悪魔男爵にまで登り詰めた男で常に不機嫌そうな眼つきと低い声で初対面の者からは悪い印象を与える。

更に敵からは皆殺しするなどの行為をされた為に目の敵にされている事から在らぬ噂を流されるなどして恐れられている。

しかし、根は優しいようで敵に手厚く接っしていて部下からも信頼されている。

寝起きと目覚めのギャップが激しく身嗜みもだらしないなど私生活では怠惰な生活をしている。

捕虜になってヴァレンタインを客人として扱い好意を抱いているが天界に帰す為に心を抑えている様子。

名前：ヴィクトリア・レオノチス・ヴァレンティン子爵令嬢

性格：真面目、繊細、優しい、悲観的

年齢：二千五百歳

容姿：金色の髪（腰まで）、朱色の瞳、雪の肌

人物：天界の貴族令嬢でありながら死天使の実働部隊に所属して数々の悪魔を殺してきた反面では婚約者のユニエール侯爵と愛を育んでいた。

しかし、夜叉王丸と対決したが敗れ何人かの兵たちと一緒に捕虜になっていたが自分だけ残されて兵たちが帰還できたのを見て悲観にした。

客人として扱われるようになって最初は戸惑ったが徐々に夜叉王丸の人柄を理解して好意を抱き始めたが天界に帰りたい気持ちとの間で苦悩している。

婚約者のユニエールに殺されそうになって自分から魔界に連れて行ってくれとフレアに頼み魔界に旅立った。

皇帝のベルゼブルからセクハラ紛いの質問を受けたり真剣に諭されたりするなど周りから玩具的存在で遊ばれている。

現在はベルゼブルたちに夜叉王丸とくっ付けさせられようと巻き込まれているが本人も夜叉王丸への気持ちに気付き始めている。

名前：フレア

性格：誠実、寡黙、世話焼き

年齢：二千五百歳

容姿：金髪のセミロング（肩まで）、水色の瞳、小麦色の肌

要約：ヴァレンタインの世話係をしている寡黙なメイド。

殆ど感情を表に出さず仕事を遂行しているがヴァレンティンが自殺しようとした時は身体を張って止めるなどの行動家でもある。

私生活がだらしない夜叉王丸の半ば母親役を担っていて毎朝、夜叉王丸を起こすのに一苦労している。

見た目は普通のメイドに見えるが軍人であるヴァレンティンを片手でベッドに押し戻すなどかなり力を持っている事から兵士か暗殺者などであると思われる。

現在はヴァレンティンの世話係と夜叉王丸の世話に多忙を極め夜叉王丸の里子となったレアから怖がられているなどして私生活では困り果てている。

名前：フォカロル將軍

性格：自分勝手、毒舌家、冷静沈着

年齢：三千歳

容姿：金髪のセミロング（肘まで）、藍色の瞳、褐色の肌

要約：空軍の將軍を務める伯爵で夜叉王丸とは戦で共に戦った仲で夜叉王丸の人柄などを良く理解している。

將軍としての立場上か冷静沈着な対応などが出来て夜叉王丸の暴走を止める役目などを担っている。

かなり人使いが荒く夜叉王丸に皮肉交じりに言われる事が度々あつて洪面を浮かべる時がある。

またかなりの毒舌家でヴァレンタインの元婚約者であるユニエール侯爵を“お伽話の騎士気取り”と酷評している。

現在は夜叉王丸とヴァレンタインの仲を取り成そうとベルゼブルたちと一緒に暗躍している動きがある。

名前：エギユン王

性格：策略家、仲間思い、陽気

年齢：二千八百歳

容姿：黒の短髪（肩まで）、緑色の瞳、白絹の肌

要約：北の都を治める地獄帝国の王族の一人であり夜叉王丸と同一年で親友的存在で大きく貢献している。

天界の真下にある土地で魔界の鬼門とも言える北の地を治めるだけあって軍事力、個人戦闘力などは王族の中でも上位クラス。

しかし通常は陽気な青年で都の民からも人気があり夜叉王丸と冗談を言い合ったりするなどの気楽な青年。

ヴァレンティンを好きでありながら天界に返そうとする夜叉王丸を心配して自分の領土に居る内にヴァレンティンに魔界に残るように促させている。

王族の中でも比較的若く夜叉王丸と歳が同じである事から何かと口煩い姑のようなビレト、ザパンの二人を“クソ爺”、“堅物”などと言っている。

名前：バル・ゼブル

性格：息子思い？、策略家、自己中、下ネタ野郎

年齢：不明

容姿：黒のセミロング（肘まで）、金色の瞳、褐色の肌

要約：七つの大罪の一つである“暴食”を司る邪神で別名を“蠅の王”とあだ名されていてサタンの次に実力者だった。

現在はサタンに代わり地獄帝国二代目を襲名して夜叉王丸の養父として面倒も見ているなど割と子煩悩だったりする。

養子である夜叉王丸が結婚せずに孫を抱けない事から嘆いていたがヴァレンタインの存在を知り夜叉王丸と結婚させようと策略を練っている。

その反面では天界の横暴などをヴァレンタインが知って多くの墮天使が増えるように策も練っているなど悪魔の頭としても考えている。

夜叉王丸の欲望に忠実な悪魔ではらしからぬ行動に怒りもせず寧ろ良い傾向に行くと見ている。

下ネタを超えてセクハラ紛いの質問をヴァレンタインに浴びせるなどして遊んでいるなどして護衛のビレット、ザパンから小言を言われている。

名前：鵜

性格：寡黙、忠誠化、夜叉王丸至上主義、真面目

年齢：不明

容姿：黒の長髪（腰まで）、黒の瞳、左頬に刀傷

要約：夜叉王丸に仕える隠密で常に音も立てずに何処からともなく現れる寡黙な従者。

天界の情報や潜入、暗殺などを手掛けていて夜叉王丸の命令を絶対として他の者の命令は聞かない。

夜叉王丸の友人であるフォカロルを一方的に嫌っていて寡黙から怒りの感情を露わにしている。

現在は天界の情報収集と軍上層部が妙な真似をしないか監視する命令を受けて天界で暗躍している。

名前：リア

性格：内向的、人見知り

年齢：百三十歳

容姿：金髪のセミロング（肩まで）、碧色の瞳、雪の肌

要約：戦火で両親を失った天界の辺境の地に住んでいた天使の娘。

グイス公爵の横領を目撃したとして村全体を焼き打ちにされて山奥

を逃げていた所を夜叉王丸の舎弟であるゼオンに助けられた。

その後はゼオンたちと一緒に天界に行き里親を探すなどしたが欲望と侮蔑に満ちた眼つきで見られた事から魔界に戻って来る事になった。

村娘にしては類い稀なる美貌に恵まれた事が理由として上げられる他に性格も内気である事が拍車を掛けたらしい。

現在は夜叉王丸が里親的役目を担っていてゼオンたちに甘えたり夜叉王丸とゲームをしたりして過ごしている。

フレアの無表情とビレト、ザパンの眼つきをかなり怖がっていて常に夜叉王丸の背中に隠れる。

名前：ゼオン

性格：義理人情家、忠誠家、世話焼き

年齢：二千三百歳

容姿：茶色の長髪（腰まで）、碧色の瞳、褐色の肌、黒の眼帯（左）

要約：夜叉王丸に仕える元罪人でありながら軍団の副長を務める実力者でもある。

夜叉王丸の命令で焼き打ちにあった村を探索して唯一の生き残りだったレアを見つけて夜叉王丸に合わせた。

孤児になったレアを昔の自分と重ねて見る節があり自分のようには成って欲しくないと思いきり親を探するなど奮闘した。

しかし、結果は無駄に終わり途方に暮れたが夜叉王丸が里親を買って出た事から問題は無くなった。

リアを年の離れた妹のように可愛がっているが若干、過保護的な行動が見え隠れして周りから遊ばれている。

第十一話：男爵の決意

男爵が護衛を申し立てた時に最初は護衛など恐れ多いと辞退したけど男爵がそれを受け入れなかった。

『お前を護る役目を他の奴に渡したくない』

皇子である男から真顔で言われて断れる女などいないだろう。

皇帝からも

『飛天なら護衛に適任だ』

と言われて男爵が護衛する事に決定した。

最初は戸惑った。

天使である私を魔界の英雄である男爵が護衛するのだから……………

同族殺しの汚名を被るかも知れないのに……………

それを懸念していたが男爵は平然とした顔で

『とうの昔に同族殺しの名前なんて被っている』

と言われた。

どういう事なのか気になってその日の夜にフレアに尋ねた。

「男爵様はかつてご自身を殺そうとした同族を皆殺しにしました」とさらりと説明された。

「その中には元皇帝であるサタン様の息子も居ましたがサタン様も承認していたので問題ありません」

無表情で淡々と説明するフレア。

私は啞然としていた。

男爵が今まで歩んできた道の凄さに驚いていたのだ。

魔族は同族が同族を殺すのを強く嫌っていて、それを破るのは禁断だと聞いた事があったからだ。

しかし、男爵は同族を殺したのだ。

普通なら極刑は免れないはずだ。

「男爵様が殺した者たちは何かしら後ろめたい事をしてきた者たちでしたので皆、気にしていませんでしたよ」

私の考えを読み取ったのかフレアが説明してくれた。

「しかし、今だに男爵様を亡き者にしようとする輩も居ますが男爵様なら心配ないでしょう」

ほっと息を吐く私を見て

「心配する方は貴方の方です」

呆れた果てた息を吐くフレア。

「貴方は天使である上に軍の指揮官でもあり皇帝陛下の覚えも良いです」

「それを妬んで貴方を狙う輩は数え切れない程にいます」

私は黙って頷いた。

ここは魔界。

私が居た天界ではない。

味方も僅かしかないのだ。

「私も出来る限り気をつけますが貴方自身も気をつけて下さい」

「……分かったわ」

重い口調で私は再度うなずいた。

ヴァレンタインの部屋を出たフレアは夜叉王丸の寝室に向かった。

城の西側にある夜叉王丸の寝室はヴァレンタインの寝室とは逆方向にある。

「……失礼します」

相手の了承を待たずに部屋の中に入る。

中に入ると武器の手入れをしている夜叉王丸がいた。

「何だ。フレアか」

夜叉王丸はちらりと自分を一瞥すると武器の手入れに戻った。

「ヴァレンタインに問題はないか？」

小太刀を研ぎながら夜叉王丸は尋ねた。

「はい。特に問題ありません」

「そうか。なら良い」

夜叉王丸はフレアに退出を命じた。

フレアは無言で一礼すると部屋から出て行った。

「・・・・・・・・・・」

夜叉王丸は無言で小太刀の刃を見た。

うつすらと光を放つ刃には少し血で汚れて濁っていた。

小太刀を鞘にしまうと夜叉王丸は後ろの腰に小太刀とモーゼル・ミリタリーを差して前腰に同田貫をベルトにぶら提げて漆黒の外套を纏うと部屋を出た。

「・・・・・・・・必ず護ってみせる」

決意を口にしながら夜叉王丸は護る存在の女の部屋へと向かった。

第十二話：貴方が傍に

男爵が命を狙われている私の護衛をするようになってから一週間が経った。

その間に男爵は常に私の傍を離れずにいた。

食事をする時も城の中を散歩する時も離れずにいた。

さすがに湯に入る時は外で待っているが、それ以外は傍を離れる事はなかった。

寝る時も私の部屋の外で朝まで護衛しているとフレアから聞いた。

嬉しいと思う反面、男爵の身体が心配と男爵との微妙な距離感を感じた。

離れた一步の距離が私と男爵の間にできた見えない壁のように思えた。

・・・天使と悪魔。

決して相容れない宿敵同士の越えられない壁。

悲しかった。

男爵が私を避けているように思えた。

一度だけ男爵に隣を歩いてくれるように頼んだ。

だけど無情にも男爵は

『・・・それは無理だ』

と冷たく断った。

胸に氷の刃が刺さったような鋭い痛みを感じた。

悲しかった。

だけど私の為だと男爵は言った。

理解している。

頭では理解してるけど悲しかった。

男爵に拒絶されたのがショックだったのか私は食事が喉を通らなかつた。

そんな私を見た皇帝が男爵に

『女を悲しませるのはお前の信条に反するのではないのか？』

と指摘して男爵を戒めた。

男爵は洗面を浮かべたが皇帝の言葉を聞き入れた。

それから私の隣に立つようになった。

私が入く隣で男爵は歩く。

何だか男爵と隣に立てるだけで天にも昇った感じがした。

ただ傍に居るだけで、こんなに嬉しいなんて知らなかった。

ユニエールの時は隣に居るだけで嬉しいと思った事なんて無いのに。

それから男爵と一緒に食事をするようになった。

私の部屋で二人で小さなテーブルに向かい合って座り食事をする。

食事中は殆ど男爵は無言だったが、それでも私を退屈させないようになっていると分かる嬉しかった。

男爵と一緒に食事をするだけでとても嬉しかった。

この幸せが永遠に続けば良いと思う。

もし、それが叶わないなら今この場で命を絶ちたい。

こんな幸せを味わっては、もう抜けられない罫に落ちたようなものだ。

一度でも落ちたら二度と上がれない蟻地獄のように……

ある日、男爵様と一緒に二人で中庭で紅茶を飲んでいると男爵の部下が来た。

「……旦那。今、戻りました」

男の名はゼオン・エルヴィン・ハンニバル。

男爵の軍団で副長を務める青年で男爵の命令で天界に私の部下と言った筈だが？

そしてゼオンの横には綺麗な金髪と碧眼をした人形のような十二、三歳の少女がいた。

「………ッ」

少女は私の顔を見ると怯えた表情になりゼオンの背中に隠れた。

「……リアが一緒って事は、無理だったのか」

どこか悲しそうに尋ねる男爵。

「いえ。里親は見つかつたんですが、リア自身が嫌がつたんです」

「どういう事だ？リア」

男爵は首を傾げた。

「あの……私、男爵様たちのお傍に居たいんです」

リアは小さな声ではつきりと言つた。

「お、お願いです。雑用でも何でもするので傍に置いて下さい」

リアは必死に頭を下げていた。

その姿はフレアに魔界に連れて行ってくれるように頼んだ時の私と同じだつた。

「……………」

男爵は黙つてリアを見つめていた。

「旦那。俺からもお願いします」

ゼオンも男爵に頭を下げた。

「……………」

しばらく思索していた顔の男爵がちらりと私を見たが直ぐにリアに向き直つた。

「・・・リア」

「は、はいっ」

リアは緊張した顔で男爵を見た。

「俺の傍に居ても構わないが、条件がある」

「条件・・・？」

リアが息を飲んだ。

「・・・このお姉さんの話し相手になってくれ」私を顎で示す男爵。

「このお姉さんはヴァレンタイン子爵令嬢で今は俺の客人として魔界に居る」

「ここまでは良いか、とリアに尋ねる男爵。

「こくん、と頷くリア。

「この城にはヴァレンタインの話し相手になる奴が居ない。だからリアが話し相手になってくれ」

私はただ聞いていた。

男爵の言った事に戸惑ったが私を気遣ってくれての事だと解った。

「どうだ？リア」

男爵はリアに尋ねた。

「や、やりますっ」

激しく首を縦に振るリアに男爵は優しく微笑んだ。

「よし。良い子だ」

ポンポンとリアの頭を撫でる男爵。

その姿は父親のように優しくも威厳に満ちていた。

不意に何かが頭を過った。

私に似た子供を男爵が優しく抱き上げていて、その隣で私が微笑んでいる幻想……………

これは私が望んでいる未来？

私は男爵と結婚したいの？

もし、もしも私がこのまま魔界に残ると言ったら男爵は何と言っ
るう……………？

私を傍に置いてくれるかしら？

…………私を、妻にしてくれるかしら？

リアの頭を優しく撫でる男爵を見ながら私は自問自答した。

第十三話：止まらない涙

リアが私の話相手になって一週間が経った。

初めは人見知りが激しく私に怯えていたが今では仲良くなって姉妹のようになっている。

ある時、男爵と三人で話し合っていると皇帝が現われて

『こうして見ると親子みたいだな』

と笑いながら言っていて私は不覚にも飲んでいた紅茶を吐いてしまった。

リアと初めて会った時にも感じた切望とも言える気持ち。

……私は男爵と一緒にになりたい。

男爵との子供が欲しい。

私は……男爵が……

「……ま、さま、ヴァレンタイン様っ」

呼ばれる声で意識を取り戻す。

視線を送るとリアが心配そうに顔を歪ませていた。

「ああ、ごめんね。リア」

私は苦笑してリアの頭を撫でた。

「・・・少し考え事をしていたのよ」

「考え事、ですか？」

首を傾げるリア。

何とない仕草でも可愛いと思う。

まだ千を二百越えたが直ぐに少女から年頃の娘に成長する。

そうなれば求婚する男は後を絶たないだろう。

「リアは将来美人になると思ったのよ」

自然と口から出た。

「あ、ありがとうございます」

リアは恥ずかしそうに礼の言葉を言った。

「ところで男爵様は？」

一気に話題を変える。

「男爵様は王様に呼ばれて行きました」

王様とはエギン王の事だろう。

「フレアは？」

「フレア様も將軍様に呼ばれて行きました」

こんな所を刺客に襲われたらどうしよう。

不安が頭を過ぎった。

今は男爵もフレアも傍にいない。

怖くてドレスの中の足が震えた。

元死天使の実働部隊に居た癖に怖がるなんて……

震える足を叱咤した。

「……リア」

「は、はいっ」

私の真剣な顔にリアは怯えた顔をした。

「……もし、刺客が来たら私が食い止めるから貴方は逃げなさい」

私の言葉にリアは驚いた。

「私は大丈夫だから、良いわね」

念を押すように言った。

「は、はいっ」

リアは、こくんと頷いた。

私はニッコリと笑った。

「良い子ね。リア」

リアの頭を一撫でした。

その時だった。

微かに背中に走った寒気。

殺気！！

私はリアを抱き抱えると机を蹴って跳躍した。

ザクツ、ザクツ

私とリアがいた場所に刺さる数本のナイフ。

「誰?!」

私はリアを後ろに庇いながら叫んだ。

私の声に答えたのか黒いフードを着た男が出て来た。

「何者だ」

男を睨みながら尋ねた。

「……………貴殿を殺すように言われた者だ」

男は短く答えると懐から数本のナイフを取り出した。

「……………」

私は辺りを見回したが武器になる物は何もなかった。

「……………」

男は無言でナイフを構えて攻撃体制を取った。

「……………リア」

私はリアに小声で話し掛けた。

「さっき話した通り私が食い止めるから逃げなさい」

「……………ッ」

リアはビクリとした。

「私が男に飛び掛かった隙に逃げなさい」

私は再度いうと同時に地面を蹴った。

「今よっ。リアー!!」

私が叫ぶと後ろに走り出す音が聞こえた。

「はあっ」

私は男との距離を縮めると正拳を繰り出した。

「・・・・・・・・」

男は無言で避けると右手のナイフで私の首筋を狙って来た。

私は脇腹に蹴りを入れようとしたが避けられた。

「・・・・・・・・」

男は左手のナイフを投げ飛ばして来た。

「くっ」

裾の長いドレスが邪魔で思うように動けない。

ギリギリの所でナイフを避けるが髪が数本切れた。

男は隙を与えずにナイフを投げ続けた。

必死に避けるが何本か肩や脇を掠めた。

「・・・・・・・・」

鋭い痛みが走ったが構わず避けた。

しかし、避けている内に壁際に追い込まれた。

「……し、しまった」

男は壁際に追い込まれた私を見て愉快そうに笑みを漏らしながら逆手に握ったナイフを手に私に飛び掛かった。

『もう駄目っ』

私はギョつと目を閉じた。

死にたくなかった。

死ぬ前に、せめて……せめて男爵にもう一度だけ会いたかった。

「……」

だが、幾ら経つても痛みは来なかった。閉じていた瞳を開けると私の目の前には漆黒の外套が目に入った。

少しずつ上を見上げるとそこには右手で男の首を握り締めながら男爵が立っていた。

そして左手にはナイフが深く刺さっていて鮮血が流れていた。

「……無事か？」

前を向いたまま男爵は私に尋ねた。

「は、はい。大丈夫です」

私は答えると腰が抜けて地面に腰掛けてしまった。

「ぐっ……」

男は首を絞められて息が出来ずに苦しいのか必死に暴れていた。

しかし、男爵は首を絞めたままだ。

それ所か更に力を込めているように見えた。

「!」

私は後ろから見えた男爵の顔を見て凍り付いた。

笑っていた。

男の首を絞めながら男爵は愉快そうに笑っていたのだ。

まるで蛇のように残酷な笑みを浮かべながら……

しかし、直ぐに無表情の顔に戻った。

「……」

男爵は暫く男の顔を見ていたが直ぐに視線を逸らすと地面に叩き付けた。

男は地面に叩き付けられると身動き一つしなかった。

「……………制御したから死んではない」

私に説明すると男爵はナイフを気にもせず地面に尻もちを着く私に視線を合わせるように片膝を着いた。

「……………っ」

私は怖くて男爵の瞳から逃げた。

「……………直ぐに治療をする」

男爵は感情のない声で言うと私の傷口に手を触れようとした。

「い、いやっ。触らないで!」

反射的に手を跳ね退けてしまった。

直ぐに後悔した。

「……………」

ちらりと怒りの表情を見せる男爵。

男爵は有無を言わずに私の傷口に触れた。

一瞬だけ痛みを感じたが後は感じなかった。

男爵が手を離れた場所は傷口が塞がっていて傷痕も無かった。

驚いている私に構わず男爵は次々と私の傷口を治してくれた。

全ての傷口を治し終えると男爵は自分の左手に刺さっていたナイフを無造作に引き抜いた。

ナイフを抜くと鮮血が飛び散ったが直ぐに治まった。

男爵は布を取り出して右手で傷口を縛ろうとした。

それを見て私は慌てて立ち上がり布で傷口を縛った。

何で私にしたように魔術で治さないんだろう。

疑問が沸いたが直ぐに罪悪感によって消えた。

私は助けしてくれた男爵の手を振り払ってしまった。

「………申し訳ありません」

心から謝罪した。

私のせいで、私が弱いから男爵が傷を負った。

「ただの掠り傷だ」

感情のない氷のような声に背筋が冷たくなった。

………怒っている。

男爵の身体から出ている気で分かった。

きつと私が手を払い退けた事に怒っているのだ。

「……直ぐにフレア達が来る」

私を見よつともせず男爵は中庭を後にした。

男爵の言う通り数分してフレアと数人の兵が駆け付けて来た。

「……大丈夫ですか？」

感情がない声でフレアが私に尋ねた。

「……」

私は無言だった。

……否。

怖くて口が聞けなかったのだ。

刺客が怖くて……男爵が怖かったのだ。

男の首を握り絞めながら笑った顔が……

無表情だったけど怒りのオーラを発していた男爵が怖かった。

ユニエールの時も感情を現にして怖かったが今度は違う。

どう説明すれば良いか分からないけど……怖かった。

「・・・・・・・・ふっ・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

私はいつの間にか涙が出て止まらなかった。

「・・・・・・・・」

フレアは優しく私の背中を撫でてくれた。

母親のように優しく撫でてくれた。

私は暫くフレアに背中を撫でられながら静かに泣き続けた。

第十四話：怪我の治療

私は男爵が怖くて堪らなかつた。

あの蛇のような残酷な笑みが頭から離れない。

私は怖くて涙が止まらなかつた。

「……………」

フレアは優しく私の背中を無言で撫でてくれた。

暫くして嗚咽が止まる頃合いを見計らってフレアは私に尋ねた。

「男爵様と何が合ったのですか？」

「……………実は……………」

私は男爵の事を話し始めた。

「……………なるほど」

フレアは納得したように頷いた。

「貴方が男爵様を怖がるのも無理はないですね」

冷静に淡々と言うフレア。

「誰だってそんな状況で見たら怖くて仕方がないでしょう」

「・・・・・・・・」

私は黙って聞いていた。

「だけど、男爵様は貴方を護る為にした事です」

フレアの言葉が胸を深く抉った。

男爵は私を護ったのだ。

刺客に刺されそうになった所を男爵は自分の左手を犠牲にして私を護ったのだ。

そして傷ついた私の治療までしてくれた。

それなのに、それなのに・・・・・・・・私は・・・・・・・・

“いやっ。触らないで！！”

拒絶してしまった。

男爵が怒るのも無理はない。

「・・・・・・・・」

悲観に暮れる私をフレアは黙って見ていたが不意に口を開いた。

「・・・・・・・・男爵様に謝りたいならこれをお持ち下さい」

目の前に出されたのは救急箱だった。

「今、男爵様は自室に居ます。まだ治療をしてない筈ですから・・・」

怪我の治療を口実に部屋の中に入れと言いたいのが解った。

「・・・ありがとう。フレア」

私はフレアに礼を言うと救急箱を受け取ると駈け出した。

・・・男爵様。

・・・私が間違っていました。

私は走りながら罪悪感に苛まされたが構わず走り続けた。

男爵の部屋は東の外れにあった。

「・・・」

私は意を決してドアノブを叩いた。

コンコン

「・・・」

無言だった。

再度たたいたが答えは同じだった。

「……………」

私はドアノブに手を掛けてみた。

するとドアが開いているのに気が付いた。

そっとドアを押しして部屋の中に入る。

部屋の中は薄暗くて視界が悪かった。

少しして視界にも慣れるとベッドで眠る男爵を見つけた。

「……………男爵様」

声を掛けたが男爵は無言だった。

「……………」

解っていたが悲しかった。

「……………うっ」

男爵から何かに苦しむような呻き声が聞こえた。

男爵のベッドまで近づきよく見てみる。

「……………ひどい汗」

私は慌てて男爵の額に手を置き熱を計る。

「……………ッ!」

あまりの熱さに驚愕した。

どうしてこんな熱を……………

頭を巡らすと刺客の事を思い出した。

刺客のナイフに毒が塗られていたのだ。

左手に巻かれていた布を取ると毒々しく黒紫色になっていた。

私は急いで傷口から毒を吸い出そうと口を近づけた。

「……………口で、毒を吸い出そうと、するな」

弱々しくも威圧的な男爵の声が耳元に聞こえた。

「……………男爵様っ。起きたのですか?」

男爵は左目で私を見た。

「……………毒は、抜いた。消毒をしてくれ」

「……………どうやって、ですか?」

私は息を飲んだ。

事は一刻を争うのだから。

「・・・・・・・・切っ先を焼いて変色している皮膚を、切り取れ」

悍ましい光景が頭を過ぎったが、すぐに行動を開始した。

蠟燭に火を点し男爵から渡された小刀の切っ先を焼いた。

「・・・・・・・・」

私は震える手で黒紫色の皮膚に小刀を刺し動かした。

肉の焼ける音と腐った卵のような臭いがしたが気にしないように作業に徹した。

その間、男爵は呻き声を出さずに耐えていた。

十分くらいで皮膚を切り終えた。

「・・・・・・・・次は、アルコールで消毒して包帯を巻け」

私は言われた通りにテーブルに置いてあった純度の高いアルコールを選ぶとピンを抜いて傷口に流した。

「・・・・・・・・グッ」

男爵が小さい呻き声を出した。

一瞬やめようとしたが男爵が眼で続ける、と言っていたので続けた。

アルコールを流し終えると包帯を巻いて縛った。

「……後は、手を洗ってフレアを呼べ」

それだけ言っていると男爵は気を失った。

やはり堪えたのだろう。

私は言われた通り用意した水桶で手を洗うと急いで近くの使用人にフレアを呼んでくるように言った。

使用人は天使である私の命令に洗面を浮かべたが男爵の命が危ないと言っていると脱兎の如く走った。

フレアは直ぐに来てくれて事情を説明すると直ぐに部屋に向かった。

「……私は後片付けをするので、貴方は新しい服を着て下さい」

フレアは用意してきた服を私に渡すと小刀などの片付けを始めた。

私も血で汚れたドレスを脱いで服に着替えた。

着替え終わると同時にフレアも片付け終えた。

「……私は何か栄養のある食べ物を用意してくるので男爵様を看っていて下さい」

フレアは私に後を任せると部屋を出て行った。

「……」

私は椅子をベッドに持って行き座った。

男爵の寝顔はまだ苦しそうだった。

汗を掻き呻き声を出していた。

「……………」

私はフレアの用意した水桶にタオルを入れて濡らすと男爵の額に置いて彷徨う右手を握った。

何も出来ないけど、せめて男爵の気が休まれば良かった。

男爵は私の手を力強く握った。

骨が折れるかと思う位の力強さで手を握られた。

だけど、こんな痛みなど男爵の苦しみに比べれば遥かにマシだと思つと痛みが薄れていった。

「……………夜叉王丸様」

初めて男爵の名前を呼んでみる。

……………飛天夜叉王丸。

馴染みのない名前だが良い名前だと思つた。

彼の名を呼ぶ人々が皆、嬉しそうにしているからだ。

そんな彼を私は……

「……私の為に、申し訳ありません」

自分の無力さに止んでいた涙が再び溢れ出した。

私をもっとしっかりと知りしていれば夜叉王丸様が毒で苦しむ事はなかったのだ。

すべて……ぜんぶ私が悪いんだ。

声押し殺して泣いていると不意に頬を撫でる感触がした。

「……泣くな」

夜叉王丸様が私の頬を包帯が巻かれた左手で拭ってくれた。

「……夜叉王丸様」

思わず名前で呼んでしまった。

「お前が泣く必要はない」

威圧的な声は変わらない。

だけど、優しさが混ざっているのは気のせい？

「でも、私のせい……」

「……お前が無事なら、それで良い」

「どうして?!」

私は我慢できずに叫んだ。

「どうして私みたいな天使の為に命を掛けられるんですか!?!」

国の為でも部下の為でもない。

ただの一人の女の為に命を掛けるなんて……

「貴方は、私みたいな女の為に……死んではいけません」

私のせいだ。

私が何時までも魔界にいるから駄目なんだ。

私が消えれば、もうこの人が傷つく事はなくなる。

天界に帰れば良いんだ。

例え帰ってどんな屈辱や侮蔑が待っていようと彼が無事ならそれで良いと思った。

「……貴方は、生きて幸せになって下さい」

私の言葉を夜叉王丸は黙って聞いていた。

「……さようなら。夜叉王丸様」

部屋から去ろうとしたが握られていた手が更に強く握られて引つ張られた。

「きゃっ」

私はバランスを崩してベッドに倒れ込んだ。

間を置かずに夜叉王丸に抱き締められた。

「……え？」

私は何が何なのか解らなかったが直ぐに理解して力の限り暴れた。

「や、夜叉王丸様っ。放して下さいっ」

しかし、夜叉王丸は解放しよとしなかった。

「……どこにも行くな」

震えるような声が耳元で聞こえた。

「……俺の傍から消えないでくれ」

弱々しく懇願するような言い方だった。

「……」

うわ言のように何度も呟くのを私は何も言わずに黙って聞いていた。

逸話：別れの挨拶

私はただ黙って夜叉王丸に抱き締められていた。

抱き締める力は強く抵抗は許されなかった。

だが、耳元で呟く声は抱き締める力とは対象的に弱々しかった。

まるで子供だ。

綺麗な蝶を掌に捕まえたけど、どうしたら良いか分からない子供。

私は何の抵抗もせず静かに夜叉王丸の背中に手を回し優しく抱き締めた。

フレアが私にしたように母親のように優しく抱き締めた。

どれくらい抱き締め合っただろう。

いつの間にか眠っていた。

目を覚ますと私を抱き締める腕の力が緩んでいた。

上の方に目をやると夜叉王丸は静かに眠っていた。

その寝顔は母親の胸で眠る赤ん坊のように安心していた。

この寝顔をずっと見ていたい。

夜叉王丸の言った言葉が頭を掠めた。

“俺の傍から消えないでくれ”

私の決意を一瞬で鈍らせた言葉。

言葉通り、この男の傍を離れたくない。

だけど、私が傍にいれば無益な血が流れる。

私のせいで血が流れるのは嫌だ。

何より夜叉王丸が傷つくのを見たくない。

だから、消えよう。

人知れず天界に帰ろう。

帰れば殺されるかも知れない。

しかし彼が無事なら私の命なんて安いものだ。

そつと夜叉王丸を起こさないようにベッドから抜け出る。

「……さようなら。夜叉王丸様」

夜叉王丸の右手に口付けをして部屋の外にあった窓から飛び出した。

背中から白い翼を出して天界に向かい飛翔した。

私の部下達は夜叉王丸の部下が保護しているから無事だろう。

死ぬのは、私だけで良い。

他は誰も死ななくて良いんだ。

私は自分の胸が急激に痛くなったが我慢して飛び続けた。

もう来る事はない魔界を背にして……………

「……………行かせて宜しかったのですか？」

無感情の声でフレアがベッドで眠っている夜叉王丸に尋ねた。

「……………」

夜叉王丸はベッドから起き上がり開けられた窓を見つめた。

「あいつを、ここに置いてても危険なだけだ」

「天界は危険ではないのですか？」

「……………」

夜叉王丸は無言だった。

天界に帰れば何の後ろ盾もないヴァレンタインは殺されるのは分かり切った事だ。

だが、ここに置いてても暗殺者の影に怯え続ける事になる。

しかし、そんな事よりも夜叉王丸が恐れているのは……………

「…………俺自身が、あいつを殺すかも知れない」

自分の手を見下し自嘲気味に頬を歪める。

「……………」

フレアは黙っていた。

この男は恐れているのだ。

ヴァレンタインに見せた残酷な笑み。

その笑みをいつか愛した女性に向けるのではないか？

大切にしている物を自分自身が壊す悲しさをフレアも知っている。

しかし、壊す前に蝶を逃がすのは愚の骨頂だ。

壊してしまう位に大切なら永遠に閉じ込めていた方が良い。

大切な物を手放して悲しんでいるよりも閉じ込めていた方が潔い。

このままでは……………また男爵は後悔するだろう。

「……………彼女を追って下さい」

フレアは決意した。

この男にはもう後悔して欲しくない。

何よりも彼女も、ヴァレンタインも本当は男爵と一緒にになりたいと思っっている。

同じ女だから分かる。

「・・・ヴァレンタイン様は男爵様を好きでした」

「・・・」

「このままでは男爵様もヴァレンタイン様も後悔します・・・
永遠に」

フレアはそれだけ言うと一礼して部屋を出て行った。

「・・・」

一人、部屋に残った夜叉王丸は床に落ちていた一枚の純白の羽を取ると握り締めて暫くの間、立っていた。

第十五話：囚われの天使

魔界から天界の境界線まで行くのは苦勞したが、その後はスムーズに進んだ。

境界線にある地方拠点に行つてその責任者に身分を明かした。

責任者は私の身を拘束すると都まで護送した。

都に帰えると直ぐに軍法会議に掛けられた。

捕虜である私には弁護士も付けられず何の準備もされず参謀長官の前に立たされた。

軍上層部から見られる中で私は死刑は免れぬと覚悟していた。

しかし、私の予想は外れて

「・・・死天使、第七十部隊隊長ヴァレンティン子爵令嬢を禁固刑に処す」

何故？

死刑ではないの？

疑問が頭に浮かんだが質問を終える前に裁判は閉廷してしまつた。

しかし、連行されている時に自分が貴族だから王族に叛旗を翻した反逆罪でも限りは死刑にならないと気づいた。

裁判が終わってから私は参謀長館が私用で建てた屋敷の一室で監禁されている。

窓には魔術で強化された鉄格子が嵌められていて扉の外には武装した二人の兵士が監視している。

部屋からは一步も出れずに話し相手も居なかった。

「……………」

無言で溜め息を吐くと椅子に座った。

「……………何で、死刑じゃなかったのかしら？」

自分は捕虜になり、あろう事が自分の意志で魔界に行き暮らした。

軍人としても天使としても貴族としても最悪だ。

幾ら貴族だからと言って死刑じゃないなんて……………

「……………父上と母上は何と出るかしら？」

政略価値もなく恥さらしな私を両親は簡単に見捨てるだろう。

元から両親は私を政略結婚の道具としか見ていなかったのだから。

だから、見捨てると思っていたのに……………またしても予想は外れた。

前触れもなく私を訪ねて来た両親は私を引き取りたいと軍上層部と交渉した。

交渉は思いの外に成立して私は両親に引き取られた。何で急に私を引き取りたいなどと言ってきたのか。

「・・・何で私を引き取ったのですか？」

揺れる馬車の中で両親に質問した。

「・・・お前は知らなくて良い事だ」

父上の慥然とした声が返答した。

「・・・」

反論したかったが許されずに終わった。

恐らく世間で引き取りたかったのだろう。

屋敷に着くと自分の部屋に案内されて終わった。

「・・・一体なにを考えているの？」

色々と考えたが結局は分からずに終わってしまった。

天界から帰還して一月が経った。

何もせず、ただ無気力に過ごす毎日が過ぎていった。

魔界に居た時はリアやフレアが話し相手になつたし、暇さえあれば皇帝や将軍が話し掛けてきた。

「……何より、魔界には……夜叉王丸がいた。」

私の命を賭してでも愛したいと想つた夜叉王丸が……

しかし、ここには夜叉王丸は居ない。

自分から彼の元を去つたのに、こんなにも身を焼かれるような痛み
に悩まされるなんて……

「……貴方は、いま無事なのですか？夜叉王丸」

鉄格子は無いが堅く閉ざされた窓から私は魔界の方角を眺めた。

腕の傷は治つたのか？

リアと仲良くしているだろうか？

色々な事が思い浮かんだ。

その時、ドアを叩く音がした。

思考を中断した。

「……どうぞ」

入室を促すと数人の下女が入ってきた。

「旦那様からの命令です。城で開かれる舞踏会に一緒に出席せよ、との事です」

淡々と説明して何着かのドレスと宝石を差し出す下女に嘆息した。

「……分かったわ」

質問しても答えは期待できないのを理解したため承諾してドレスを選び始めた。

青、赤、翠、紺、黄色などと様々なドレスを見た。

本当なら好きな相手の為に皆は選ぶが私の好きな人は傍にいない。

だから、ドレスも宝石もどうでもよかったので適当に下女に選ばせた。

下女が選んだのはシンプルな赤のフォーマルドレスと金の首飾りとエメラルドの指環だった。

それで良いと言って下女に支度をさせた。

「出来たか？ヴァレンタイン」

二時間後、父上が私の部屋を訪れた頃には支度を終えていた。

父上はちらっと私を一瞥しただけで母上と一緒に部屋を出て行き私も数歩下がって後を追った。

下男下女に見送られながら私と両親を乗せた馬車は城へと向かった。

「・・・・・・・・・・」

馬車に揺られている内に夢を見ていた。

漆黒の鎧を身に纏った夜叉王丸の腕の中で私が微笑んでいる夢だ。

これが夢ではなく現実なら、どんなに喜んだ事だろうか。

武人らしい逞しい肉体、鋭くも優しさがある漆黒の瞳、腰まで伸びた闇の髪・・・・・・・・全て私が望んだもの。

夜叉王丸と一緒にになれるなら白い翼が黒く染まり“墮天”の汚名を付けられようと平気なのに・・・・・・・・

馬車が止まるのと同時に馬車から降りた。

馬車の外では白銀の真新しい甲冑に身を包んだ騎士が出迎えてきた。

・・・・・・・・何の真似？

私が戸惑っていると

「ヴァレンタイン様に敬礼!!」

指揮官らしき男が敬礼すると他の騎士達も習った。

「・・・・・・・・」

私は訳が解らず首を傾げたか騎士達は気にしていなかった。

寧ろ納得するような顔をしていた。

「驚いても無理はありませんね」

指揮官は微笑んだ。

「ヴァレンティン様は捕虜になりながら飛天夜叉王丸を倒し帰還した英雄です」

「今日、城で開かれる夜会はヴァレンティン様の完治と天界への帰還を祝う夜会です」

一瞬、言われた事が解らなかった。

私が夜叉王丸を倒した？

そんな事がある訳がないのに………

疑問と同時に両親が私を引き取った理由が解った。

世間体柄、私を引き取って名を売りたいのだ。

何て貪欲な両親なのだろう。

自分の両親でありながら私は嫌悪感を滲ませた。

「さあ、中にお入り下さい。ユニエール侯爵も首を長くして待っています」

ユニエールの名前を聞いて私は逃げたい気持ちになったが、両親が左右に立っている為に逃げる事ができずに、城の中へと足を進めた。

「おお、ヴァレンタイン。無事だったんだね」

ダンス会場に行くとユニエールが見え透いた演技で私に近づいて来た。

同時に周りの視点が一斉に私に注がれて孤独感と嫌悪感が湧き上がった。

私を殺そうとして利用価値が無くなると冷たく拒絶したのに、こころいと手の平を返してくるユニエールを睨んだ。

「心配してたんだよ。君を助けられずに天界に戻った時には……」

睨む私に苦笑しながらユニエールは近づいてきた。

私の頬に触れようと手を伸ばしてきた。

いや、近づかないでっ。

私に触らないでっ。

全身から寒気が走ったが足が動かなかった。

もう少しでユニエールの手が届きそうになった時だ。

「……その娘、ヴァレンタインに触れるな」

低くナイフのように鋭く氷のように冷たい声。

「き、貴様っ。何でここに……………!!」

「……………」

私は聞き間違いなのか確かめる為に後ろを振り返った。

漆黒の鎧に身を纏い黒の長髪を後ろで一本に結って左の黒の瞳は鋭く私に触れようとしたユニエールを睨んでいた。

あ、嗚呼……………

貴方様は……………

「……………飛天夜叉王丸様」

私は震える声で愛しながら消えた男の名前を呼んだ。

第十六話：不可侵条約

その場にいた者たちの動きが全て止まったように見えた。

「……否。」

全員の動きが止まっているのだ。

身体から放たれる威圧感は場の者たちを圧倒して鋭く研ぎ澄まされた黒の瞳は真つ直ぐに私を捕らえていた。

「……」

私は何も言えずに夜叉王丸を見つめていた。

「……」

不意に鋭かった夜叉王丸の瞳が優しく笑ったように見えた。

ドキッ

と心が時めいた。

「や……」

私は無意識に夜叉王丸に歩もうとしたが

「貴様つ。何しに天界に来た?!」

ユニエールが私の腕を掴んで叫び声を上げると会場の者達は動き出した。

騎士達は剣と槍を片手に夜叉王丸を囲んだ。

「のこのこ一人で来るとは馬鹿な男だ」

ユニエールは勝ち誇った笑みを浮かべた。

「……………」

対して夜叉王丸は落ち着いた表情で何も言わなかった。

「ヴァレンタインを傷つけた罪を晴らしてやる」

ユニエールの合図で一斉に夜叉王丸に襲い掛かるうとした。

「…………やめい!!」

大声で威嚇のある声が部屋に響いた。

「その悪魔を、飛天夜叉王丸殿を殺すな!？」

夜叉王丸の後ろから出て来たのは軍上層部の一人で都の警備を一切取り仕切っている高級参謀だった。

「この方は魔界からの正式な使者だ。殺す事はならん」

使者? どういう事?

私を含めて皆は首を傾げた。

「この度、魔界と天界は不可侵条約を結ぶ事にした」

その為に夜叉王丸と数人の使者が来たんだと説明する参謀。

「天界が魔界と条約など……………!!」

ユニエールを始め数人の騎士たちが激怒した。

それはそうだろう。

魔界が出来てから数千年が経ったが一度も条約を結んだ事などないのだから……………

「これはもう決まった事だ」

ユニエールの反論を無視する形で参謀は続けた。

「これから暫くの間、夜叉王丸殿と使者は城に滞在する」

決して剣を向けるな、と無言の圧力を出す参謀。

その圧力にユニエールと騎士たちは唇を噛んだ。

「…………時にヴァレンタイン令嬢」

不意にわたしを見て話し掛ける参謀。

「は、はいっ」

「夜叉王丸殿を客室に案内しろ」

参謀の命令に私は無言で頷くと夜叉王丸に近づきドレスの裾を持って会釈した。

顔見知りとはいえ、この場で親しむ態度は厳禁だ。

「……ヴァレンタイン子爵令嬢です。どうぞ、こちらへ」

私が挨拶すると夜叉王丸も解っていたのか被っていた帽子を取り会釈してきた。

「……飛天夜叉王丸男爵だ。宜しく頼むよ。レディ・ヴァレンタイン」

黒の瞳で微笑み掛ける夜叉王丸。

その姿を見て、また会えた嬉しさに涙が出るのを抑えて私は夜叉王丸を連れて舞踏会場を後にした。

舞踏会場を出る時に後方で参謀が

「今日の舞踏会は終わりだ」

と言つのを遠くで聞いた。

それと同時にユニエールの怒鳴り声が聞こえたが敢えて無視する事に決めた。

第十七話：再開と告白

何十本もの火の蠟燭がステンドグラスや美術品に反射して煌びやかに輝く廊下を私は夜叉王丸を先導して歩いていった。

部屋に着くまで私の胸の鼓動は激しく動いていた。

『どうして夜叉王丸が来ているの？』

魔界からの和睦使者だと夜叉王丸は言った。

仮にも皇子である夜叉王丸が敵陣に数人の部下だけを連れて来るなど無謀もいい所だ。

あまりの無謀さに怒りを感じたが同時に無事である事と再び会えた事が嬉しかった。

一月前と変わらない様子の夜叉王丸に安堵の気持ちが出たが表には出さずに事務的な動きで客室まで案内した。

「……………こちらが部屋です」

客室のドアを開け夜叉王丸を中に入れる。

「……………では、私はこれで失礼します」

本当はまだ居たかったが、長居すぎると変に思われると判断して退出しようとした。

恐らく私がこの部屋を出れば、もう会う事はないだろう。

『さようなら。夜叉王丸』

一礼して部屋から立ち去ろうとした。

しかし、腕を掴まれ振り向かされると唇を奪われた。

「……ッ!!」

一瞬だけ理解できなかったが唇が重なる感触で我に返った。

すぐに離れようとしたが回された腕に後頭部を抑えられた。

夜叉王丸の口から舌が出され無理やり私の口を割ると中に入ってきた。

「……!!」

夜叉王丸は貪るような動きで私の口の中を凌辱した。

貪る舌は情熱的に口内を動き回り私の舌を絡め取ると優しくなぞった。

「……!!」

ビクッ

と反応する私を夜叉王丸は瞳を細めて咽喉で笑った。

私は初めての経験で何の抵抗も出来ず彼にされるがままにいた。

呼吸が苦しくなり足に力が入らなくなり夜叉王丸にもたれ掛かると彼は力強い腕で抱き締めた。

私は彼の背中に手を回ししがみ着いた。

どの位の時間が経ったか分からない。

暫くしてからやっと解放された。

唇を離すと銀色に光る唾液の糸が橋を作っていた。

荒い息をして身体に力が入らない私を夜叉王丸は優しく横抱きにする。とベッドまで運んでくれた。

ベッドに行くまで間近で夜叉王丸の顔が見えた。

美形とは違い逞しく男気に溢れていた。

ベッドに着くとゆっくりと降ろされた。

「・・・お前に会いたかったぞ。ヴァレンタイン」

ベッドに座る私を優しい瞳で見て微笑む夜叉王丸。

さっきの情熱で獣のような口付けをした男とは思えなかった。

「・・・どうして・・・」

私は啞然として言葉が出なかった。

行き成り唇を奪われ舌まで入れられたのだから……！！
呆然とする私に夜叉王丸は笑いながら言った。

「お前を迎えに来た」

「私を迎えに……？」

何を言われているのか解らなかった。

私が天界に帰れるように身を費やしていたのに、何で私を迎えに？

「別れ際にあんな殺し文句を言われたら連れ戻したくなる」

くくくくつ、と咽喉で笑う夜叉王丸。魔界に居た時のように無表情か強張った顔ではなく愉快そうに笑っている。

これが本当の夜叉王丸の姿かも知れないと感じた。

だけど、ここで矛盾に気付いた。

夜叉王丸は私を天界に帰そうとしていた。

何で今更になって私を迎えに来るなんて真似を……？

そして、さっきの口付けは何だったのだ？あの口付けは……
まるで罪を咎めるような口付けだった。

私は何をしたというの？

「お前、自分の想いを気付かれてないとか思っているのか？」

私の考えを読んだように喋る夜叉王丸。

「俺はお前の気持ちを知っていた」

衝撃の事実を言われた。

夜叉王丸は私の好意を知っていた。

その事を聞いて我慢していた気持ちが爆発した。

「・・・だ、だったら、何で私を天界に返すなどと言ったのですか？！」

貴方が天界に返すなんて言わなければ、私も覚悟を決めて魔界に骨を埋める気だった。

私の気持ちを知らながらなんで私を・・・・・・・・

「・・・・・・・・すまなかった」

涙を流す私を優しく抱き締める夜叉王丸。

「お前が天界に帰りたいがっついていたら、無理やり魔界に縛り付けるのは良くないと思ったんだ」

すまないと再度、謝る夜叉王丸。

これは私にも落ち度があると思う。

私が未練がましくしていたから、こんな事になってしまったのだ。

しかし、夜叉王丸は私を責めなかった。

暫く私を抱き締めていた夜叉王丸が不意に離れて私に視線を合わせた。

彼の黒真珠の瞳と私の緋色の瞳が重なった。

「今さら遅いかも知れないが……」

一度、言葉を切ると決心したように口を開いた。

「……俺と一緒に魔界に帰ってくれないか？」

抱き締めていた手を私の肩に置き話し掛ける夜叉王丸に私は頷いた。

「……はい。貴方と一緒にいきます」

貴方と一緒になら地の果てでも平気。爵位も職務も故郷も全て捨てる。

貴方を愛する事が出来るのなら天に、神に弓を引いて“墮天”の汚名を被るのも厭わない。

だから、私をずっと貴方の傍に置いて……

最終話：紅の墮天使

永年、争い続けていた天界が魔界と和睦を結んだ。

和睦を結んでからは双方共に平和へと歩んでいくように見えた。

しかし、和睦から百年後に天界は一方的に魔界との和睦を破棄し戦を仕掛けて来た。

対して魔界も予想していたのか軍を派遣した。

互いに一步も引かずに続けられた戦いは多くの死者を生み出す事になった。

そして双方の全国力を投入した嘗てない大戦である天魔大戦にまで発展した。

この戦いで天使と悪魔の戦死者の数は、天文学的な数字を叩き出した。

戦いは七日七晩も続いたが他の世界から一方的に和睦を破棄した天界が悪いと声上がり出し戦を続けられなくなった天界の方から和睦を申し込んで来た。

謀略の疑いを魔界は示したが互いの国力も限界に達した事から和睦を結ぶ事に踏み切った。

この戦でも飛天夜叉王丸は活躍して名前を轟かせた。

彼の隣には真紅の鎧を身に纏い金の長髪を靡かせ大鎌を奮い獅子奮迅する妻の姿がいた。

素顔は誰も知らないが綺麗な女性で常に夜叉王丸の傍にいて背後を守り和睦の席でも隣に立っていた。

そして大戦が終決すると一つの噂が広がった。

飛天夜叉王丸の傍に付き従う妻が、かつて天界の英雄と謳われたヴァレンタイン子爵令嬢ではないかと……………

一度目の魔界と和睦を結んだ日にヴァレンタイン子爵令嬢の姿が消えた三日後に夜叉王丸に妻が出来たからだ。

更にヴァレンタインは捕虜になった経験もあるから、その時に夜叉王丸と恋仲になったと噂が広がりがヴァレンタインの家は不名誉として取り潰しになり婚約者だったユニエール侯爵は今までの悪行を知られ軍法会議に掛けられ投獄された。

一方のヴァレンタインは消息不明のまま死亡扱いとなった。

しかし死体が見つからないのが拍車を掛け夜叉王丸との悲恋物語として詩や劇で悲劇のヒロインになった。

そして魔界でも……………

「嗚呼、なぜ君が天使で私は悪魔なんだ？こんなに愛し合っているのに結ばれないなんて……………」

「嗚呼、私もよ。どうして天使と悪魔なのかしら……………」

夜叉王丸役の悪魔が切なげな声を出しヴァレンタイン役の悪魔に手を差し出す。

「……………今は、結ばれなくても来世ではきつと結ばれよう。ヴァレンタイン」

「……………ええ。来世ではきつと、きつと結ばれましょう」

差し出された手を取り二人は互いに短剣で刺し違える所で幕は下りた。

夜叉王丸とヴァレンタインの悲恋劇を最高級の特等席で見下ろす一組の夫婦の姿があった。

黒色のフロック式軍服に身を包んだ男の隣には赤いドレスを着た金髪の女性が座っていた。

劇が終わると席から立ち上がり舞台場を後にした。

「……………自分の恋愛を劇にされるのは恥ずかしいな」

煉瓦の道を歩きながら苦笑混じりに言う男は地獄帝国男爵、飛天夜叉王丸。

「私もよ。もう恥ずかしくて見てられなかったわ」

隣で笑う女性はヴィクトリア・レオノチス・ヴァレンタイン。

正確にはヴァレンタイン男爵夫人になる。

天界と和睦を結んだ日にヴァレンタインは夜叉王丸と一緒に魔界に帰って式を挙げて夫婦になった。

初めは疑いと侮蔑の眼差しで見られた。

そんな眼差しを払拭したいと思い戦では積極的に自分に掛けられた疑いの眼差しを解消する為に元仲間である天使と戦い続けた。

それが功を奏したのか今では誰もヴァレンタインを悪く言う者はいない。

「さあて、早く帰らないとリアが怒るから急ぐか」

「ええ。そうね」

二人は頷くと背中から二つの翼を出した。

夜叉王丸が黒い鴉の羽でヴァレンタインも“墮天”の証である漆黒の羽を出して天高く飛び立った。

演劇や詩では悲恋として描かれているが本当は夫婦になったのを知る者は限られている。

後にヴァレンタインは夜叉王丸の背中を血まみれになりながら護った事から

“紅き墮天使”

という異名を取り多くの尊敬を集めるのは後世の話である。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3442d/>

禁じられた恋

2010年10月12日02時40分発行